非情な天使（改稿編）

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
非情な天使（改稿編）

【Ｎコード】
Ｎ７７８９Ｖ

【作者名】
ドラキュラ

【あらすじ】
イギリスの首都ロンドンにあるオンボロ探偵事務所に住むシンシア。女がてらに拳銃をぶっ放し暗黒街を渡り歩く彼女の正体は神の左に座る事を許された大天使ガブリエル。スリルを求めて人間界に降りた彼女は、そこで偶然にも人間から悪魔にした男と再会する事となった。自分の信念を崩さずに非情に生きる天使のハードボイルド。

プロローグ：銀の弾丸（前書き）

数年前に書いた非情な天使の改稿編です。

傭兵の国盗り物語も書いていますが、今の時点は書き直しや誤字脱字を探しているのでもう少し時間がかかりそうです。

皆様には、ご迷惑を掛けて申し訳ありません。

プロローグ：銀の弾丸

霧の都と謳われるイギリスの首都ロンドン。

昼は観光客などで賑わっているが夜のロンドンは犯罪者などが蔓延るヨーロッパの暗黒街。

そんな危険な街で私以外は誰も居ない静かなクラシックバーでモーツァルトの鎮魂歌――――“安息を”を聴きながらバーテンが出した“ブラッディ・マリー”を飲んでいた。

ブラッディ・マリーまたの名をブラッディ・メアリー。

トマト・ジュース――――血を連想させる真紅の色から、１６世紀にイングランドでプロテスタント（新興宗教）を次々と殺したため「血まみれのメアリー」（ブラッディ・メアリー）と恐れられた女王、メアリー・チューダー（メアリー1世）が名前のモデルとされている。

味は自分好みに調節可能で私の場合は血が凍る程――冷血な程に冷たい味が好み。

赤いのに冷たい味が何ともミステリアスな感じで好きなのよ。

その冷血な酒を飲み続けながら安息を、を聴き続ける。

彼の天才作曲家である“ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト”が死ぬ直前に書いたが途中で没し、弟子が補筆して完成された曲。

死ぬ直前まで書き続けただけあって、まるで自分自身に捧げるかのような曲。

普段音楽は聴かないが、これは聴いても平気。

最後まで聴き終えた私は既に半分になったブラッディ・マリーを牛革のコースターの上に置いた。

そして左手に嵌めた腕時計ーーーーーーオメガのスピードマスターに視線を落とした。

時刻は・・・午前零時。

ちょうど彼と待ち合わせの時間になった。

腕時計から眼を離すのを合図にしたようにタイミング良くドアが開いて一人の男性が中に入って来た。

腰まで伸びた黒髪を真後ろで一本に纏めている。

黒一色の服はまるで誰かに「愛を捧げている」ように見えてしまう。

それが私には悲しいと同時に嫉妬という炎が心の中で燃え上がるのを感じた。

喪服のように黒い服に身を包んだ男性は２０代後半でアジア系の肌色をしていたが、顔立ちはロシア系の色が強い。

整った顔立ちと月のように神秘的な金色の瞳・・・・夜の王という

名が相応しい。

黒のソフト帽と黒のトレンチコートが眼に入ったが何より目立つのは右の黒い眼帯が視線を釘付けにする。

眼帯を付けている事もあり一目で堅気ではないと判るが、その他にも身体から放たれる張り詰められた気と硝煙とオイルの臭いでも堅気ではないと判る。

でも、誰もが彼の放つ独特の雰囲気に飲まれている。

・・・・・彼だ。

彼は椅子に座っていた私を一瞥すると隣に座りバーテンにウィスキーをベースにした“マンハッタン”を頼んだ。

カクテルの女王という異名を持つこのカクテルはニューヨークにあるマンハッタン島に落ちる夕日をイメージして作られたと言われている。

バーテンダーがマンハッタンを作る間、彼は懐に左手を入れて一箱取り出した。

黒い箱で中央には人型が描かれている。

彼の愛煙草ーーーーー“夜歩く”だ。

文学的な名前だが何処の煙草店にも置いていない。

彼だけが吸う特別な煙草だ。

箱を開けて1本だけ取り出すと口に銜えてジッポライターで火を点けた。

その仕草を私は瞬きもせずに見入った。

私以外の女達も彼に見入っているが、彼は「視線に入らない」という感じだった。

バーテンダーが出したマンハッタンを受け取る手は手袋で隠れていたが隙間から見える生傷に戦慄さえ覚えてしまう。

しかし、戦慄と同時に心が躍るのだ。

こんな男とこれから私は仕事をするのだという事にどうしようもないスリルを感じてしまう。

私は彼の隣に席を移動すると小さく囁いた。

「久し振りね。飛天」

男、飛天は眉ひとつ動かさずに低い声で私の名前を呼んだ。

「・・・・久し振りだな。ガブリエル」

彼に名前を呼ばれただけで心がウキウキしてきた。

さも初めての恋人とデートに行く生娘みたいに・・・・・・・・・

「何か用か？」

感情の無い声で私に質問してくる飛天に私は苦笑した。

「相変わらず愛想の無い男ね」

彼を笑わせようとしたが、無表情だった。

それ所か腰を上げた。

「・・・・要件が無いなら帰る」

出されたマンハッタンに手も出さずに席を立とうとする彼を私は内心では少し焦ったが表情には出さずに止めた。

大変な事を忘れていた。

今日は、六月四日・・・・・・飛天にとっては忘れたくても忘れられない出来事が起きた日だった。

そんな日に会う約束をした自分の軽薄さを呪った。

だが、そんな表情は微塵も出さずに私はこう言った。

「そんなに急かさないで」

私はブラッディ・マリーを飲み干すとバーテンダーに新しいカクテルを頼んだ。

バーテンは直ぐに準備に取り掛かって数分後に出されたカクテルを見て彼は少し表情を歪めた。

「・・・・シルバー・ブレッド」

シルバー・ブレッド――――銀の弾。

在りとあらゆる化物を殺す事が出来ると言われる銀の弾丸から名を取ったカクテル。

私と彼だけにある秘密の暗号。

「・・・・・・・・・・」

彼は無言で席に戻ると出されたマンハッタンには手も付けずシルバー・ブレットに手を出した。

「・・・・依頼内容は？」

シルバー・ブレットを飲みながら静かに訊いてくる声は私を芯から根こそぎ骨抜きにするような声だった。

「ちょっとした町の“ゴミ掃除”よ」

嬉しくて堪らないのを必死に抑えて私は囁いた。

「・・・・分かった」

飛天はシルバー・ブレットを一気に飲むと席を立った。

「場所と時間は後で連絡してくれ」

要件を言うと飛天は金を払い出て行ってしまった。

私は懐から自分の愛煙草――――ゴロワーズを取り出して銜えるとＢＡＲにあるマッチで火を点けた。

一息煙を吐いてから飛天の頼んだマンハッタンを飲んで店を後にした。

――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――

虫も眠るとされる深夜2時。

誰も居ない霧が深い夜のロンドン。

その深い霧が出ている夜のロンドンでは屋根伝いに動く獣が一匹いた。

私は静かに狙いを定めると銃の引き金を引いた。

ドォン!!

大きな音が街中に響いて獣が屋根から落ちた。

しかし、空中で体勢を整えると見事に地面に着地して私を黄色の瞳で睨んで来た。

「・・・・くそ、天使風情が・・・・・・」

「その汚い口を閉じてくれない？息が詰まるんだけど」

私は余裕の態度で獣に言った。

獣の身体からは青白い液体が無数に出ていた。

私が撃った銀の弾丸の効力で血が止まらないのよ。

「・・・・・・・・」

獣は私に飛び掛かって来た。

しかし、私は余裕の表情で銃を仕舞うと瞳を閉じた。

「後は頼んだわ。・・・・・飛天」

獣の爪が私の額に一歩という所で獣の動きが止まって額から血しぶきを上げて倒れた。

獣は私の足元で息絶えて口から血泡を噴き出して息絶えた。

「・・・・良い腕ね」

私は後方でライフルを構えている飛天に微笑んだ。

距離はざっと軽く見ても８００ｍはあるが、私には間近に見える距離だ。

「・・・・・・・・・」

飛天は何も言わずにライフルを仕舞うと姿を消した。

残った私はゴロワーズに火を点けて少し留まっていたが倒れた獣を見つめた。

皆が起きる朝方の頃には灰になって消える事だろう。

異形の者の末路など碌なものじゃない。

それは天使である私も同じ事でもあり悪魔である飛天も変わらない。

無論・・・あの女もまたこんな無様な死を迎える事だろう。

何れ・・・ね。

私は皮肉気に笑ってその場を立ち去った。

その夜は6月4日という彼にとっても私にとっても余りおめでたい日ではなかった。

第一章：かつての親友

イギリスの首都ロンドン北部に位置する“イズリントン”の外れにある少し古びた建物が事務所兼住み家だ。

ここには二、三年前から人間界に降りてひっそりと住み始めている。

イズリントンはイギリス一と称されるほど多様な階級層が住んでいるの。

それが嫌というほど眼に入るのはよくある事。

私の住んでいるオンボロ建物の隣は超高級マンションだもの

住む所なんて何処でも良かったのだが、ヨーロッパなら色々と便利であると何となく思っただけ。

何で天使の私が人間界に居るの？と何時も訊かれるわ。

天使は天界に住むのが普通で人間界ーーー下界にはそう足は運ばない。

何故か？言うなら行く必要性も無いし、行けば人手が足りなくなるから。

天界も最近は不祥事が多かったり信仰心が減ったりしててんてこ舞いに忙しいのよ。

で、その天使である私が何で下界と蔑むような所に居るのか？とい

う答えは到って簡単。

『スリルを味わいたいから』

天界などという偽善者の集まる糞溜めのような場所より欲望が渦巻く人間界でスリルを味わいながら生きたかった。

まぁ、他にも理由はあるけど大抵の奴等に答える台詞をここでは言わせてもらうわ。

スリルを味わいたい一心で仕事を放棄して人間界に降りたの。

元々仕事は部下に丸投げしていたから部下にとっても良い事だと思っているわ。

人間界に降りた私は魔術を使わずに自分の腕だけを頼りに裏世界で生きる事に決めた。

魔術は今の人間界では認められていないが理由。

今は科学が進歩して魔術などの類いは「存在しない」と言われているの。

要は自分達が手に入らない代物であり胡散臭い物を信じたくないだけの話だけどね。

でも私にとっては魔術を使わない正確に言えば使えない状況は嬉しい限りだ。

魔術を使えば一発で済む相手も使えないとなれば倒すのも難しい。

危うければ私が殺される可能性だってあるが、それこそ究極のスリルでしょ？

魔術を使わない私が武器としているのは銃。

人間界には争いの道具が沢山あって助かるわ。

で、私が使っている拳銃は“コルト・パイソン３５７マグナム”というリボルバー。

アメリカのコルト社が開発した６連発式のダブルアクション式リボルバーで“３５７マグナム”という強力な弾を発射する事が出来る。

ちなみにパイソンは蛇の名前。

天界では蛇は悪を意味する。

その蛇の名を持つ拳銃を愛銃にしている私。

中々の皮肉でしょ？

その拳銃を頼りに私は一匹狼を貫き裏世界に足を踏み入れた。

最初こそ情けない仕事ばかりで嫌気が差したけど直ぐに頭角を出してマフィアやギャングといった人間でいうなら悪党の輩が私に仕事を頼みに来た。

私が待ち望んでいた危険で欲望が渦巻く仕事だ。

スリルが好きな私には断る必要もないから二つ返事で直ぐにＯＫを出した。

最初の依頼は大した事ではなかったが、少しずつ大きな仕事を任されるようになった。

そして、運命的とも言える仕事を頼まれる日が来た。

敵対する組織を潰せという事だった。

私が雇われた組織はフランスに手を伸ばしたかったが、そこには邪魔な組織が居る。

だからその組織を潰せ、と言われたの。

直ぐに行動を開始して組織を潰しに掛ったが、そこで思わぬ人物と再会する事となった。

・・・・・飛天だ。

かつて私が人間から悪魔にした男である飛天。

彼が私の潰す組織にいたのよ。

しかも、その組織の長というから驚いたわ。

でも彼は私を見ても顔色ひとつ変えずに攻撃してきた。

酷い話でしょ？

古い馴染みの女に挨拶代わりに鉛玉を撃って来たんだから・・・・・・・

まぁ、私もお返しとばかりに飛天を撃って双方ともに銃弾を食らう事になったけど。

私は飛天の７．６３ｍｍモーゼル弾を飛天は私の３５７マグナム弾を受けて重傷を負い結局は警察の手も出て来たので痛み分けという事で依頼は不完全に終わった。

だけど、組織としてはまだ諦めていなかったらしく二度目の攻撃を行おうとした。

でも、その矢先に皆殺しにされて壊滅となった。

誰がやったかは見当が付くでしょ？

雇われた組織を壊滅された私は銀で作られた７．６３ｍｍモーゼル弾の傷を癒すと直ぐに飛天を探し出した。

普通なら直ぐに治るんだけど、銀で作られた－－－銀製の物で攻撃されると治りが遅いのよ。

銀の武器は善悪を問わず絶大な効果を発揮するの。

天使である私も例外じゃないわ。

話を戻すと傷を癒した私は飛天を探した。

直ぐに居場所は尽き止めたけど、ね。

彼はイギリスではなくフランスのマルセイユというフランス一の港街に住んでいた。

そこで彼は畏敬の念を込めて“伯爵”と呼ばれていたわ。

私が来るのを飛天は予想していたのか訊ねてきた私を見ても平然として丸い氷が入ったロック・グラスにスコッチを注いで煽っていた。

そして私にも酒を勧めてきた。

断る理由など何処にも無いから私は頷いてグラスを片手に飛天とスコッチを飲みながら話し合った。

飛天は悪魔になってから敵対していた同族を皆殺しにして魔界での地位を確立させたがそこからは暇でしょうがなかったらしい。

最近は魔界も飽和気味らしくて皆、血の香りに飢えていたらしいわ。

そんなに魔界を出て人間界に来た飛天は裏世界に入りあっと言う間に君臨した。

主な仕事は古いマフィアが手を染めた仕事だけど、表の仕事もしているというし彼に助けを求める人間達を助けているらしい。

神にでもなった積り？と訊いたけど彼はそれを鼻で嗤った。

次に私は魔界で同族を殺した事について質問した。

同族殺しは魔界では禁じられている。

もし、行えば極刑は免れない。

しかし、皇帝であり彼の養父でもある蠅の王ーーーベルゼブルが直々に命令したから問題ないと聞いた。

今度は飛天が訊いて来たが私も同じようなものだと答えると少し皮肉気に笑われた。

どういう経緯かは忘れたけどその日の夜、初めて飛天とベッドを共にした。

酒の勢いか私に銃弾を撃ち込んだ男への意趣返しか分からなかった。

しかし、そんな事を考える暇もなく私はベッドで獣の雄叫びのように啼き続ける事になった。

飛天の荒々しいキスで力を抜かれて荒々しい剣で身体を貫かれてからは快楽の如く啼き続けて貪られた。

こんな事は初めてだったが、やはり私が見込んだだけの男であると歓喜が湧いた。

行為が終わりベッドで煙草を蒸かす隣の飛天に私は提案した。

『私と手を組まない？』

彼となら今まで以上にスリルを味わえるだろう。

しかし、飛天の答えはＮＯだった。

『他人と手は組まない』

そう言われた時には少なからず落胆した。

私は貴方にとっては他人なの？

貴方に抱かれたのに・・・・・

らしくない・・・女々しい事を思った。

そんな私を見て飛天はこう続けた。

『だが、依頼なら受けてやる』

つまり依頼をすれば飛天と仕事が出来るという事だった。

この言葉には一にもなく了承して一時的だが飛天とコンビを組む事になった。

依頼の内容は簡単。

人間界で傍若無人に暴れ回るダニ共を始末する事。

悪魔、天使、精霊・・・・・・・・

そいつらを灰にするのが仕事。

もうそれを何年もしているが、未だに飛天とは一時的なコンビから抜け出せない。

私としては永遠の相棒となりたいのに。

まぁ、こんな酒の肴にもならない話は終わりにしましょう。

現在、私は事務所で時間が過ぎるのをただソファーで寝そべって煙草を蒸かしながら待っている。

私の事務所に客が来るのは極めて異例と言える。

マフィアと絡んでいる事も理由の一つだが、私自身が下らない依頼は引き受けないからも含まれている。

いま吸っている煙草の銘柄はフランスのゴロワーズ。

ゴロワーズとは直訳すると「ゴール人の女」を意味し現代のフランスにあたる地方の古名で形容詞では「好色な」、「陽気な」の意味合いを持つ。

イラストは兜に羽が生えた絵で、これは古代ガリア人の騎士が被っていた兜で後にフランスの伝統的な兜になったわ。

初めて人間界に降りた時に立ち寄ったＢＡＲに置いてあったのを吸い始めてから愛用するようになった。

仕事が無い時はいつもソファーでこれを吸いながら時間が過ぎるのを待っている。

天界でも同じで恐らく飛天も私と同じような気持ちだったのだろう。

そんな下らない事を考えながらゴロワーズを銜えたまま煙を吐き出して白のペンキを塗られた天井を見上げた。

元々は白かったのが煙草の煙で少し汚く黄色っぽかったが、こっちの方が私は気に入っている。

飛天に依頼をして仕事を済ませてから一週間。

その間が何も仕事が無くて暇だった。

これが会社経営の探偵事務所なら依頼は沢山あるだろう。

浮気調査、ペット捜索、ストーカー対策、盗聴対策などとスリルの欠片も無い退屈な仕事ばかりでそんな仕事だったら事務所で煙草を蒸かしていた方が何倍もマシだった。

「飛天は何をしているのかしら？」

彼は人脈が広くマフィア同士の喧嘩の仲介や武器密売などを手広くやっているから私より暇ではない。

何だか無性に知りたくなって飛天の携帯に電話を掛けたが留守電だったので電話をくれるように伝言をした。

携帯をテーブルに置いた時にドアを叩く音が聞こえた。

「・・・・・・」

私は音を立てずに左脇に吊るしていた革製のホルスターからパイソン３５７マグナムを取り出して静かにドアに近づいた。

バンッ

勢いよくドアを開けてマグナムを向けた。

「・・・・いきなり物騒な出迎えね」

呆れた声でパイソンの銃口を向けられながら口にするのは女の口調は冷静だった。

顔立ちは端正な職人が鑿で丹念に掘ったように整えられており同性からは嫉妬を、男からは好色な眼差しを向けられる事だろう。

身体も出る所は出て、締まる所は締まっている身体だからね。

髪は茶色で尻まで伸ばした長髪ーーーロング・ヘアー。

瞳は髪の色よりも濃い色の鳶色で服装は質素な白いブラウスと薄紫のロングスカートを履いている。

見た目が良いから何を着ても似合う女なのよね。

中身は最悪だけど。

「・・・・貴方だったの。“ラファエル”」

パイソンの銃口を下ろし名前を呼んだ。

私と同じ天使で癒しを司り悪霊退治を生業とする大天使ラファエル。

神の熱、輝ける者という名称を持ち旅人の守護者でもある。
真面目で優しい彼女は私と真逆の性格だけど、昔は変に馬が合って親友と呼べる間柄だったわ。
そう・・・昔は、ね・・・・・・・・・
「何か用？」
私はパイソンをホルスターの中に仕舞うとラファエルを事務所の中に入れた。
どうせ、訊かなくても内容は分かっているが・・・・・・・・・・・・・
「・・・・分かってるでしょ？」
ラファエルは困った口調で勧められたソファーに座った。
「・・・・分からないわね」
私は敢えて誤魔化そうとした。
「・・・・天界に帰りましょう」
真剣な眼差しを送り私に告げるラファエル。
毎度の事だがいい加減にして欲しい。
この女がここに来るのは何時も同じ。

私を天界に帰えるようにする為の説得。

天界を去ってから直ぐに居場所を突き止めると月に一度か若しくは半年に一回の回数で私の説得に来る。

「貴方が天界を出て行って仕事が私にも回って来て大変なのよ」

「そう。それは大変ね」

感情を込めずに返事をしてゴロワーズを銜えて火を点けた。

ラファエルは僅かに咳をした。

「煙草は止しなさい」

「あんたに言われたくないわ」

私はラファエルに煙を吐いて言ってやった。

ラファエルは余り怒らない方だが、こればかりは眉を顰めた。

「・・・・貴方が天界を去って貴方の部下達が大変なのよ」

「それで？」

「・・・・・・・・・」

これにはラファエルも閉口した。

私は気にせずゴロワーズを肺に入れて少し煙を出した。

すると携帯の着信音が鳴った。
ラファエルの了解を得ずに電話に出た。
「・・・・はい？」
『・・・・何か用か？』
電話の相手は飛天だった。
何て悪い時に電話を掛けて来たのよ。
私は心の中で愚痴ったが飛天は知る由もない。
『・・・・どうした？』
少し大きな声で喋る飛天に私は平静を装って答えた。
「・・・いいえ。何でもないわ」
ラファエルが居る傍ら落ち着いた口調で喋る。
この女に相手が飛天だと知られたら厄介だからだ。
『なら良い。それで何か用か？』
「これから会わない？」
『・・・・分かった』

飛天は少し間をおいてから答えた。
恐らく僅かに考えたんでしょうね。
「それじゃ、今から一時間後に前のＢＡＲで」
要件だけを伝えると電話を一方的に切った。
「という訳で私は出かけるから」
「ちょ、ガブリエル！！」
私は急いで茶色のトレンチコートを羽織ると止めようとするラファエルを押し退けて事務所の直ぐ隣に立っている車庫に向かった。
そこ停めてある紺色に塗った“シエトロン・ＤＳ”に乗った。
シエトロンはフランスの自動車メーカーであるシエトロンが開発した前輪駆動の車。
独特な油圧サスペンションをこれまた独自の油圧機構で統括構成しており登場時は「２０年先を進んだ車」と言われたわ。
今でも愛車としている者もいると聞いているけど、まぁクラシックな人と思われるでしょうね。
私の場合もそうだけど。
シエトロン・ＤＳに乗り込んだ私は鍵を回した。

シエトロンはクラッチを始め全てを油圧ーーーハイドロニューマチックサスペンションの油圧を利用する。

ギア・チェンジは手動だけど、それ以外は全て油圧を利用しているから扱うには少しコツが居る。

でも、そういう所がまた私の興味を引くのだけど。

エンジンが掛ると私はギアをローに入れてゆっくりと走らせた。

そして一般道路に出ると一気にギアをチェンジしてスピードを上げＢＡＲへと急いだ。

第二章：罪と過去と枷

ロンドンの街をシエトロン・ＤＳで走りながら左腕に填めたオメガのスピードマスターを見る。

午後の５時。

まだ約束の時間には３０分も余裕がある。

「少し早過ぎたわね」

ＢＡＲに行っても開店してないだろうしどうやって時間を潰そうかしら？

３０分も大人しく待っているほど私は大人しい女ではない。

そんな事を思っていると信号が赤になった。

余裕を持ってブレーキを掛けてトップギアから一気にセカンドギアに変えてスピードを落とし再度ブレーキを掛けて停車させた。

停車中も考えてみたが、良い案が出ずに結局は時間まで車を走らせる事にした。

途中で警察にスピード違反と言う情けない罪で追われたが食事前の良い運動だと思い十分に遊んでから捲いてやった。

それから三十分後に近くの駐車場に車を停めてＢＡＲに向かった。

飛天は既にＢＡＲの前で待っていた。

相変わらず黒一色の服で死神に見えるが、牝犬共からは熱い視線を送られている。

「・・・・お待たせ。飛天」

私はそんな飛天に話しかける事で牝犬共を追い払った。

「・・・・いや。別に大して待ってない」

彼は短くなった煙草ーーー夜歩くを携帯灰皿に入れて答えた。

低い声で無駄がなく答える姿に何処か惹かれた。

「・・・で、俺に何か用か？」

「実はラファエルが事務所に来たの」

それで逃げてきたと正直に打ち明けた。

嘘を吐いても何時かはバレテしまう。

それなら今の内に打ち明けておこうと思った。

「・・・・・・」

飛天の表情が若干だが動いた。

「・・・・あの女が？」

声にも僅かながら感情が込められていた。

「えぇ。まぁ、何時もと同じで私の説得なんだけどね」

苦笑する私に飛天は無表情に一言だけ口にした。

「・・・そうか」

短い言葉だったが、明らかに怒りが混ざっていた。

恐らくラファエルの事だろう。

この男とラファエル。

そして私と“もう一人”には大きな過去がある。

他人には言えないし知られたくない過去。

・・・・・飛天はあの時、何も出来ない自分を深く恥じているし後悔している。

なぜ自分はあの時、何も出来なかった？

なぜ自分はあの時、“彼の女”を助ける事が出来なかった？

もう何年・・・何十年・・・何百年・・・何千年と後悔している。

そして2人を怨み、憎み、殺したいと思った。

自分の人生を滅茶苦茶に蹂躙し彼女を奪い、その腹に宿されていた新しい命を奪い去ったあの２人を。

・・・彼は“魔へ身を堕した”・・・・・・・・・・・・・

復讐と言う気を身体に宿し・・・・・・・・

人間が魔へと身を墜すのは簡単だ。

何故なら人間ほど心が弱い物は居ないから。

だから、飛天は簡単に魔へとなれた。

でも、それだけでは駄目。

魔へと墜ちながらも生前の記憶と魂を持ち続けるには強力な力が必要だ。

この力は人間一人では駄目。

私は、彼に力を与えた。

私にも負い目はある。

親友と呼べた女の狂気に気付かなかった事。

妹と呼べた娘の気持ちを理解できなかった。

だけど、それは後付けの理由に過ぎないと分かり切っている。

・・・・彼を愛したから。

彼を悪魔にしてから数百年経った時、彼女と再会した。

彼女は私に詰問した。

『どうして彼が魔へとなる事に力を貸したのっ』

彼女は私の胸倉を掴み、上下に揺さぶりながら涙声で詰問した。

魔へとなった彼。

彼女は魔を退治するのが役目。

愛する彼を殺す事になる。

だから、私を涙を流しながら責め立てるのも道理だ。

だけど、それを私は冷めた眼で見ていた。

彼を魔へとする時、私は彼の過去を知った。

だから、親友と呼べた女はもう親友では無かった。

私はそんな彼女にこう答えた。

『どうして？何故ですって？貴方には彼をあそこまで追い詰めた理由を知っているでしょ？』

何故なら彼女が彼をあそこまで追い詰めたから。

私の言葉に彼女は黙った。

理由を知っているから。

そんな彼女に私はこう続けた。

『私は彼を魔にした事を後悔していないわ。いいえ・・・寧ろ嬉しいと思っているわ』

この言葉に彼女は驚いた顔をした。

驚くと同時に嬉しいと言った私に怒りを宿していた。

『私は・・・彼を愛している。彼の為なら何でもするわ。彼は魔になりたいから力を貸せ、と言ったわ』

愛する男の頼み。

自分ではない別の女性を愛している男の願い。

彼に愛してもらえなくても良い。

少しでも彼の力になれるなら・・・・彼の傍に居られるなら・・・・良かった。

それを聞いた彼女は私に平手打ちをした。

乾いた音と共に鈍い痛みが頬に感じる。

私はそれを甘んじて受け止めた。

これは私の罪。

親友を止められなかった罪であり親友を裏切った罪。

『私は一度、堕天したわ。貴方と違って私は彼と一緒になれる。彼は私の男よ。貴方には渡さない』

それが決定打とも言えた。

それから私は親友と袂を別ち合った。

・・・・・・・・大昔の事を思い出したわね。

私は年寄りみたいに過去を思い出すなんてどうかしている、と自嘲した。

「それで貴方はどうやってロンドンまで来たの？」

私は過去を離れて今の事を口にした。

地下鉄やタクシーなどを想像しようとしたが無理だった。

こんな人がそんな物に乗る訳が無い。

乗る姿なんて見ようものならコメディ映画を1本ほど撮れるだけの笑いを誘うだろうから。

「部下が送ってくれた」

やっぱり電車などの類いで来た訳ではなかった。

「なら良いわ。私の車で行きましょう」

私は先に歩くと飛天も少し間を置いて付いて来た。

飛天が私の隣に立った。

私より頭2つ分も背が高い飛天。

だから、私は彼を下から見上げる形となるがそれが良かった。

私を見下す彼の瞳は月のように神秘的な光を持ち魔力を秘めている。

右の眼は・・・眼帯で隠している。

罪の証であり自分に対する“枷”・・・・・・・・・

彼が眼帯を外す時は、枷を破壊すると言う事。

その意味は・・・自分が怪物へと変貌する時。

それは何としてでも避けなければならない。

どんな手を使ってでも、ね・・・・・・・・

私の気持ちなど知る由も無い彼はコートの中から夜歩くを取り出して火を点けながら訊ねてきた。

「・・・・何処に行くんだ？」

「私が懇意しているスペイン料理屋よ」

私も夜歩くを貰ってジッポライターで火を点けて答えた。

「スペイン料理か」

どこか乗り気じゃない様子をみせる飛天。

「嫌なの？」

「・・・・・別に」

素っ気ない返事をすると飛天は助士席に座った。

大きな身体を窮屈そうにして座る飛天は何処か可愛気があって私は小さく微笑した。

エンジンを掛けて車を走らせるとロンドンの街から放たれる光が輝かしい宝石のように一瞬だけ見えた。

でも一瞬だけ。

所詮は見かけ倒し・・・本当の宝石は中身から光を放つ物。

こんな物は見かけ倒しの石でしか無い。

直ぐに視線を外してシエトロン・ＤＳの運転に集中する。

少し間をおいて後を付けて来る車の存在に私は不覚にも気付かなかった。

車を走らせている間、飛天は無言だった。

私も敢えて何かを言おうとは思わなかったので無言で運転を続ける。

しかし、飛天は何時の間にか寝てしまった。

声を掛けても起きない。

敢えて起こすのもどうかと思い私は寝かせておく事にした。

どんな夢を見ているのか？

気にはなった。

だけど、それを知る術を私は持ち合せていない。

持ち合せてはいないが・・・・・想像は出来る。

きっと悪い夢を見ている。

もし、そうなら私が壊して上げたい。

壊して彼に幸せな夢をみせて上げたい。

所が彼は呻き声一つ上げないでいた。

顔は微笑んでいた。

まるで宝物を見つけた子供のように綺麗な笑みを浮かべて・・・・・・・・・・・

『良い夢を見ているのね。飛天』

私はそんな飛天を見て、安堵の気持ちを覚えた。

第三章：堕天使の笑み

「・・・・着いたわよ。飛天」

店の前に到着した私は隣で眠る飛天の肩を叩いて起こそうとした。

ここに来るまでの間、彼は何時の間にか寝ていた。

赤ん坊みたいに可愛らしい寝息を立てて・・・・その寝顔に私は終始笑顔だったのは記憶に新しい。

こんな可愛い顔も出来るのね、と思った程だ。

何時も彼は無表情で無愛想。

笑顔なんて私は一度も見た事が無い。

だけど、今回は彼の寝顔が見れたから儲け物だ。

私が車を停めた店はロンドン郊外にある。

小さな店で偶々みつけてから月に何度か食べるようになったスペイン料理屋。

でも、どういう訳かイギリスのファースト・フードの代表とも言える“フィッシュ・アンド・チップス”も作っている。

どちらかと言うと、こちらの方が頼まれるのが多いのよね。

「・・・着いたのか？」
飛天は僅かに不機嫌そうな低い声で訊ねてきた。
寝起きが悪いのよね・・・彼。
「えぇ。だから起きて」
私は彼を怒らせないように優しい声で言った。
「・・・・分かった」
飛天は眠たそうに瞳を擦りながら車から降りた。
いつもは無表情の鉄仮面だが無意識に見せる仕草などは子供のように可愛らしく暗黒街の者たちからは密かに笑い種にされている。
彼はそれを知っているのかしら？と不意に思ったが敢えてそれは言わないでおいた。
「ここはフィッシュ・アンド・チップスがお勧めよ」
「何でスペイン料理屋なのに、イギリスのファースト・フードが勧め品なんだ？」
「細かい事は気にしないで行きましょう」
私はまだ眠たそうな瞳の飛天の腕を掴んで店の中へと入った。
「何だ。誰かと思えば阿婆擦れ女のシンシアじゃねぇか」

中に入ると店の主人が出迎えてくれた。
今年で７０になると聞いているが髪も豊富で身体着きも丈夫だから
１０歳くらいは若返っているように見える。
おまけに毒舌で客に対する接客も最低なの。
でも味は保証できるから店主の態度に我慢できるなら穴場よ。
ちなみにシンシアとは私の人間界での偽名よ。
「今日は珍しく男連れかって・・・・・・・伯爵様じゃねぇか！！」
主人は飛天の顔を知っているのか大声を上げて座っていた椅子から
転げ落ちた。
「・・・・何だ。お前の開いている店だったのか」
飛天は主人の顔を見ると小さく言った。
「は、はいっ。あ、あの時は大変お世話になりました！！」
主人は転げ落ちたが直ぐに立ち上がると勢いよく頭を下げた。
「知り合いなの？」
「・・・・昔、仕事で助けた」
「そうなの？」

私は店主に訊ねた。

「あぁ。昔、ドジって危機に陥っていたわしの命を助けてくれて更に仕事まで与えてくれたのが伯爵様だ。伯爵様はわしの恩人だ」

胸を張る主人に私は淡々と命令した。

「それは分かったから、フィッシュ・アンド・チップスを作って」

「何だ。その命令口調は？おまけに“トミー”の料理を作れだと？ここはスペイン料理屋だぞ！！」

トミーとはイギリス人の蔑称で差別用語だった筈。

それをよくもまぁ、こうも大声で言えるものだわ。

「それが客に対する態度なの？それに美味い物を頼んで何が悪いのよ。あんたの気持ちは溝にでも放り込んで作ってよ」

「相変わらず口が辛い女だ」

明らかに不快な表情をしたが文句を言いながらも店主は厨房へと消えて行った。

「さぁ、私たちは席に座りましょう」

私は適当なテーブル席に飛天を座らせた。

客は誰も居ないが、逆に飛天と二人切りで食事ができると思うと嬉

しさが込み上げてくる。

飛天は席に座ると銜えていた夜歩くに彫刻の入ったジッポライターで火を点けた。

「相変わらず良いライターの趣味をしているわね」

飛天の使っているライターはデザインも使い易さも良くて多くの者たちが真似て使っている。

私も真似て彫刻の入ったジッポライターを使用している。

私もゴロワーズ吸おうと思い箱を取り出したが生憎の空だったので飛天の夜歩くを貰う事にした。

ジッポライターで火を点けて煙を肺の中に入れると少し鈍い痛みが走ったが気にせず吸い続けて余った煙を吐き出した。

夜歩くを吸い終える頃に店主がフィッシュ・アンド・チップスを持って来た。

「お待たせしました。伯爵様」

「ありがとう」

礼の言葉を出す飛天。

癖なのか飛天は注文した物を出されると礼を言う。

普通は礼を言うものなのか分からなかったが、律儀な飛天なら納得

できた。

「ありがとうございます。伯爵様」

店主は嬉しそうに頭を下げて厨房の中へと戻って行った。

そして皿に盛り付けられたフィッシュ・アンド・チップスを食べようとした時に窓ガラスが割れて銃弾が入って来た。

私と飛天は直ぐにテーブルを引っ繰り倒してバリケードにした。

「せっかく夕食をしようとした時によくも邪魔してくれたわね」

私は苛立った声で言いながらコルト・パイソンを取り出し弾倉ラッチを引いて６発入っている事を確認した。

「・・・せっかくの料理が台無しだな」

飛天も不機嫌そうな声を出しながら“モーゼルＭ７１２”を取り出した。

ドイツの老舗銃器メーカーであるモーゼル社が１８９６年に開発したモーゼルＣ９６をフルオート可能にしたモデル。

通常の拳銃よりも大きい上に重いし癖のある銃だ。

ただし、木製のホルスターをグリップの後ろに取り付ければカービン銃として使う事も出来る。

まぁ今では誰も使わない古臭い銃だけど。

「・・・・何人かしら？」

バリケードにしたテーブルに弾が食い込むのを感じながら私は飛天に訊ねた。

「・・・5、6人・・・・いや、9、10人だな」

鳴り止まない銃声の中で私たちは敵の人数を確認していた。

飛天はモーゼルの撃鉄を起こし、反撃に出ようとした。

「加勢しますぜ！伯爵様！！」

そこへ店主が水平二連式のショットガンを持って駆け付けて来た。

エプロン姿に葉巻を銜えておまけにショットガンとは・・・・何処のコメディ映画に出て来そうな出で立ちだ。

「おぉ。サンキュウ」

飛天は気さくに笑いながらテーブルから上半身を出して敵に発砲した。

店主と私も続いて発砲する。

周りは民家などが無い事から迷惑も掛らないと思いながら私は敵が乗って来た車のエンジンを狙って発砲した。

二、三発当たるとエンジンから火が吹き車は爆発した。

車の近くにいた敵も巻き添えを食らったが悲鳴一つ上げなかった。

「・・・・・何か怪しいわね」

“普通”の人間なら悲鳴の一つや二つ上げる。

しかし、彼らは悲鳴を上げない。

答えは二つ。

一つ薬物か何かで口が聞けない。

一つ彼らは人間じゃない。

「まぁ、どっちでも良いわね」

私は考えるのを止めた。

攻撃して来た時点で殺すだけ。

一々考えていたら切りが無いからね。

１０人程の敵はあっという間に殺した。

歯ごたえが無さ過ぎて嫌気が差しながら残りの二発で敵の脳天に銃弾を撃ち込んで仕留めた。

「奴ら何者かしら？」

弾倉ラッチを後ろに引き弾倉を出した。
エジェクター・ロッドで殻になった弾をまとめて排出してスピード・ロッダーで纏めて装填した。
そしてシリンダーを手で押して戻した。
「さぁな。ただ“普通”じゃない」
飛天も感づいていたのか新しいマガジンを取り出して、空になったマガジンを捨て新しいマガジンを装填しながら答えた。
モーゼルＣ９６はクリップ装填と呼ばれる装填方法を採用したが、Ｍ７１２では弾倉を交換する事も出来る。
またＣ９６のクリップ装填も可能だ。
「そう言えば、近頃ですが貧民街の奴らが居なくなってるって噂を聞きました」
水平式ショットガンを折り、新しい１２ゲージの弾を装填し直しながら店主は飛天に告げた。
「って事は奴ら貧民街の奴らか」
モーゼルをホルスターに仕舞いながら飛天は店主に確認するように訊いた。
「えぇ。恐らく・・・・・・・」

確証はないと言っている顔だった。

「何の為かは知らんが使い捨て、というなら良い考えだ」

飛天は冷静な口調で言うとまだ生きていた敵にモーゼルで止めを刺した。

そして彼は無愛想な顔を私に向けて一言だけ告げた。

「詰めが甘い」

「ごめんなさい」

私は謝った。

敵を仕留め損なった・・・ムカつくわ。

でも、私はその感情を抑えて殺した奴等の素性を考えてみた。

確かに貧民街の奴らを使えば足は着き難い。

はした金を握らせれば良いだけだ。

捜索願いを出す家族も居ないから死んでも誰も分からない。

使い捨てとしては実に都合が良い。

「・・・・何もんかは知らんが喧嘩を売って来たんだ。手加減はしない」

誰に言う訳でもない飛天の言葉。

その後は店主に店の修理代とフィッシュ・アンド・チップスの料金を払って飛天と別れる事になった。

帰り道・・・シエトロン・ＤＳを運転しながら私は思った。

一体誰がこんな真似をしたかは分からないけど、少しは退屈しのぎが出来そうだ、と私は薄らと笑みを浮かべた。

天使のような慈愛に満ちた笑みではなく・・・・堕天した時の笑みを浮かべて・・・・・・

第四章：最高の言葉を

襲撃されてから半年が経ち十二月になった。

ロンドンの冬は雪が降らない割に寒さが尋常ではなく酒の進みが速くなる。

襲撃が遭ってから飛天は暗黒街の人脈を活かして貧民街の奴らを洗わせていた。

それで分かった事は身なりの良い若者が貧民街の者たちに仕事を与えると言って何処かへ連れて行った、という手掛かり。

胡散臭いと思った連中はひっそりと身を潜めていたそうだが、そうでない者達はヒョイヒョイと付いて行き・・・戻って来なかった。

飛天が動いている傍らで私はと言うと人脈も無いから暇な一日を過ごしていたかというとそうでもなかった。

現在、私はある女の行方を追っている。

依頼主は彼女の両親。

共に熱心なカトリック信者で、日曜日に教会へ通いボランティアなどにも積極的に参加している。

教会から見れば画に描いたような慎ましい信者だろう。

でも、些か縛られ過ぎるきらいがあるし偏見の面もある。

私の事務所を訪れた時もそうだ。

『こんなゴミ溜めのような場所によく住めるな』

よくまぁ、自分で依頼をしに来たのに言えるわね、と言いたかったが気紛れでそれは言わずに話を聞いた。

『娘は私達の気持ちを分かろうとしない。これも全ては、不浄な物が世の中に溢れているせいだっ』

両親は今の世の中が余程嫌いらしく何かと今の世は、と言い続ける。

今の世は確かに両親が言う通り不浄な・・・快楽などを貪れる物が多い。

でも、それは人が願い欲した物。

それを同じ人間がああでもないこうでもない、と言うのはお門違いと言える。

こんな頭のネジが数本も抜けたような両親に育てられた娘が不憫でならないわ。

娘も幼い頃は両親が言う事が全て正しいと思っていたようだけど、成長して行くに連れて疑問を感じたらしい。

まぁ、そうでしょうね。

今の世の中、何処からでも情報は溢れ出しているんだから。

そして娘は両親に反発を覚えて大学へと通い一人暮らしを始めようとした。

しかし、それを両親が許す訳も無い。

それに反発して一週間前に家を出て行ったらしい。

両親を見ていると娘が家を出たのも分からなくもないと思った。

カトリックは旧教でプロテスタントは新教を意味する。

プロテスタントはカトリックが衰退し始めた１６世紀中ごろにドイツの聖職者であった“ルター”が起こした。

ルターはカトリックだったけど、後に破門されたけど民衆に押されてプロテスタントが出来あがった。

所謂“宗教改革”という奴よ。

最初は互いに嫌悪し合っていたわ。

私がＢＡＲで飲んでいたブラッディ・マリーこと“血まみれメアリー”が起こしたプロテスタント信者３００人を殺した実例もある。

今はそんな事は無いけど、それでも溝はある。

それこそ一人の信者から見れば尚更、ね。

そしてあの両親を見る限り頭から足までガチガチに凝り固まったカトリック信者に間違いない。

そんな両親の元で育った娘はどんなに辛かっただろう。

自由な時間を束縛され将来も決められていたに違いない。

そんな彼女も大学生になり、そこで恋をしたが両親は大反対して恋は叶わず絶望して家を出た、というのが私の推測だ。

断っても良かったけど、気紛れで人助けをする事にした。

そして今は街中で娘の行方を探し回っていた。

直ぐに手掛かりを見つけた。

「写真の娘なら二日前に身なりの良い男に声を掛けられていたね」

貧民街に住んでいる者に写真を見せて訊ねて返って来た言葉。

男の容貌や風体も訊くと貧民街をうろついていた男と一致した。

私は何か裏があると思い訊き込みを続けた。

丸二日で分かった事を紙に書いてみた。

男は自分をキリスト教徒だと言って貧民街の者たちに仕事を与えると言って連れ出して無人島に建てられた建物で働かせている事。

家出娘も男に連れて行かれた事も分かった。

私は娘の事を両親に報告するかどうか考えた。
話しを聞かせれば娘を取り戻しに行って私の仕事は終わりだ。
だが、裏に何かあると思い報告は見送る事にした。
二日目の昼過ぎに事務所に帰ると飛天が玄関前で待っていた。
「・・・・帰って来たか」
飛天は吸い終えた夜歩くを床に捨てた。
その仕草からどこか苛立った様子が窺える。
「話がありそうね。中へどうぞ」
私は飛天を事務所の中に入れた。
「半年の間で調べた事を教える」
勧められたソファーに座ると突拍子もなく飛天は話し始めた。
飛天の話では半年の間に貧民街の他に家出人なども行方不明になった事。
そのどれもが身なりの良くキリスト教徒だと言う若い男と接触している事。
そして男に連れて行かれた人間は無人島の建物に連れて行かれ人が

変わったように敬虔的な性格になって平和を望むようになった事。

「気になって男の正体を調べてみた」

懐から封筒を取り出して私に差し出した。

私は封筒の中から資料を取り出して見てみる。

男は二十四歳の時に平和の為としてマフィアのボスを殺した。

そこで殺されなかったのは運が悪かったわね。

裁判を受けて自分は「平和の為にやった」と公言したが、マフィアだろうと人は人。

しかも、法が出来あがった今の世では無罪なんて有り得ない。

もちろん判決は有罪で精神病院に入院させられた。

精神病院に入れられた直後に結婚していた妻から離婚を宣言されたがカトリックの為に離婚は成立しないと裁判を起こすが離婚は成立した。

しかし、男は精神病院から退院すると真っ先に別れた妻と再婚相手の所へ行きナイフでめった刺しにして殺した。

今度は刑務所に入った。

更に運は悪い方へと傾く。

入所した刑務所でヴァチカンから破門を勧告されて刑務所の中でも差別や虐めにあって心身ともに疲れ切って等々イカレタらしい。

それからは前以上に平和の為と称して刑務所内で馬鹿騒ぎを起こしたり演説をしたりして独房の常連客となったらしい。

現在四十八歳になった彼は自分に浸透した者達が集めた金で無人島に巨大な施設を作って何やら怪しい行動をしている。

そして男によって殺された元妻の両親が飛天を訪ねて仇を討って欲しいと依頼してきたらしい。

「これが、俺の調べた結果だ」

飛天は話しを終えると夜歩くを銜えながら足を組んだ。

「事件の黒幕は・・・妄想に取り付かれた救い様の無い哀れな男だ」

まったく憐れみの念を感じない言葉を言いながら飛天は煙を吐いた。

「それでお前は？」

「私も似たようなものよ」

自分の調べた事と依頼も話した。

「・・・・なるほど」

飛天は何やら思案している顔だった。

暫く考えた後に飛天は唐突に言った。

「・・・・少し暴れるか」

最初は何を言っているのか分からなかったが、直ぐに理解した。

飛天は無人島に乗り込む気なのだ。

自分を殺そうとした報復と両親の依頼を果たす為に・・・・・・・・・

「その話・・・乗ったわ」

私は一にもなく言った。

売られた喧嘩は倍返しが私のモットーだし何より男自身が気に食わない。

「今から二時間後に無人島に乗り込む」

それだけ言うと飛天は事務所を出て行った。

私はそれを見送って準備に取り掛かった。

準備と言っても仰々しい物ではない。

シエトロン・DSのトランクから三つに分解した“トンプソンSMG”と100発のドラムマガジンを取り出して慣れた手つきで組み立て始めた。

かなり古いが私はデザインが気に入っている。
トンプソンＳＭＧを組み立て終えてゴロワーズを蒸かして待つ事二時間、飛天が黒の１９７７年代のＢＭＷ・Ｅ２３で迎えに来た。
「貴方の武器は？」
助士席に座って飛天に訊いた。
「“モスバーグＭ５９０”だ」
元外人部隊出身で傭兵であった飛天らしい武器の選び方だと思った。
ショットガンは弾が飛び散るから下手な銃よりも協力だし出会い頭で威力を発揮する。
飛天の持ってきたモスバーグＭ５９０はアメリカ海兵隊を始めとした特殊部隊から警察も愛用しているポンプアクション式のショットガンだ。
口径は一般的な１２ゲージで弾数は８発で多少は乱暴に扱っても壊れたりはしない上に銃剣も装着可能だ。
「・・・お前は？」
エンジンを掛けながら聞いてくる飛天。
「私は貴方と違ってマシンガンよ」
コートの中からトンプソンＳＭＧドラムマガジンを取り出した。

「・・・・随分と古い銃を使うな」

飛天は苦笑が入った金色の瞳で私を見た。

「別に良いじゃない。私の好みなんだから」

軽く口喧嘩をしながら私と飛天は無人島へと向かった。

車から降りて飛天の部下が用意した船を見て私は唖然とした。

「魚雷艇って貴方・・・・・戦争でも起こす気？」

流石に魚雷艇は無いと思った。

「この写真を見たら巡洋艦でも引っ張り出したくなる」

目の前に突き出した写真には機関銃などで武装されていた島が写っていた。

「一体どうやってここまで揃えたのかしら？」

「さぁな。もう潰れるのに関係ないがな」

「所でこの魚雷艇の名前は？」

「特攻艇、“震洋”だ」

「特攻？」

特攻って飛天の故郷がした無謀とも言える戦略じゃない。
一度だけの出撃で大切な戦略を失わせるなど愚略と言わないで何と言うの？
「まさかこれで敵陣に突っ込むの？」
「ほぉう。よく分かったな。まぁ、途中で乗り捨てて俺達は上陸するから安心しろ」
飛天はニヤリと笑った。
さっきまで飛天が本当に突っ込むと思っていた。
「さぁ乗るぞ」
飛天は私を誘って震洋に乗って島に向かった。
「・・・・取り敢えず軽く作戦を立てるぞ」
夜歩くを吸いながら飛天は喋り出した。
「単純にこいつに付いているミサイル二本で機関銃を破壊してから停船場に突っ込んで船を爆破する」
「帰りはどうするのよ？」
「心配するな。部下が迎えに来る」
その言葉を聞いて私は安心してトンプソンにドラムマガジンを装着

させた。

「それを聞いて心置きなく暴れられるわ」

「ふっ。頼もしい女だ」

飛天はまた口端を上げてニヤリと笑った。

そのニヒルな笑みに私はどうしようもなく欲情した。

戦いが始まる前と終わる前は身体が熱くなる。

それを考えると、この欲情にも納得できる。

私と飛天を乗せた震洋は暗い海を走り始めた。

港を発進してから三十分後に目的地の島へと着いた。

「それじゃ、行くぞ」

飛天はスピードをＭＡＸにして付けていたミサイルを発射して機関銃を反撃の間も置かずに破壊した。

次の目的地である停船場には待ち伏せしていたサブマシンガンなどで武装した男たちが待ち構えていた。

「・・・・ぶつかると同時に行くぞ」

飛天は飛んでくる弾を避けながら言った。

「了解よ」

私もトンプソンを乱射しながら頷いた。

震洋は真っ直ぐ停船場に突っ込んだ。

その一足先に私と飛天は震洋から飛び降りて施設に侵入した。

濡れるのを嫌って、その時は魔術を使用してしまったが・・・・・・・・・・

「・・・お前は娘を探せ。俺は糞男を探す」

モスバーグを片手に飛天は私と反対側の左側に足を運び私は右側に向かった。

暫く歩いていると何人かの軍服を着た兵士が前から来て私に容赦なく発砲してきた。

「・・・・手荒い歓迎ね」

私は横の壁に隠れると小さく苦笑しながらトンプソンを乱射した。

兵士たちは肩や足に弾が命中したのに苦痛に顔を歪めたり悲鳴も上げずに発砲を続けていた。

「・・・・痛みが感じないなら脳天に撃ち込むしかなさそうね」

小さく嘆息して壁を飛び出て男たちに突っ込んだ。

男たちの脳天に弾を撃ち込むとやっと事切れた。
私は死体の前でしゃがみ眼を見た。
瞳には力が無く死んだ魚のように空虚な瞳だった。
「・・・・誰かに操られていたって所かしら？」
麻薬漬けにすれば他人を操るなど簡単だが、ここまで操るとなると呪術か催眠術じゃないと無理だ。
「・・・・一体、何をしたのかしら？」
私は違和感を覚えながら依頼主の娘を探した。
幾つもドアを蹴破って中を見たが写真の娘は居なかった。
どこに居るのかと悩んでいたが窓越しから見えた東側の施設に入ろうとする一組の男女が見えた。
私は東側の施設へ急いだ。
目的地に行くと三十代の男が嫌がる娘の腕を引いて変な機械に近づこうとしていた。
「これで君も悩まなくて済む」
「嫌！放して！！」
娘は必死に男から逃れようとしていた。

「ちょっと嫌がる女に何をしようとしているの？」

私は静かに部屋に入り言葉を放った。

「誰だ？貴様は？！」

男は乱入者の私を見て警戒心剥き出しで叫んだ。

眼つきが狂人のようにギラギラしている・・・完全にイカレタ野郎の眼つきだった。

「誰でも良いでしょ。それより娘を放しなさい」

トンプソンＳＭＧを向けながら男に命令した。

「ふんっ。そんな銃で私は死なん！！私は天使の加護が付いている！？」

余りのイカレッぷりに私は茫然とした。

私の見る限りイカレ男に天使どころか悪魔も精霊も憑依してなかった。

「どうだ？私が怖いか？」

「・・・・いいえ」

私は馬鹿らしくなりゴロワーズを取り出して銜えた。

「君は見所があるね。よしっ。君にも私の理想を教えてやろう」

何を思ったのか男は私に演説を始めた。

「私は人類すべての脳から争いや欲を取り除き平和な楽園を作ろうとしているのだ！！」

それから男は自分の考えに共感した学者などが作った脳を改造する機械で貧民街から連れて来た人間をサンプルに実験をしていたらしい。

要は人体実験をして実験を成功させただけでしょ？と思った。

呆れる私を尻目に男は尚も演説を続けた。

「続いて私は、手始めにここ一体を支配している“伯爵”を殺そうと思った。あの男が醜悪の権化に間違いないからな」

確かに飛天は暗黒街を仕切り悪事に手を染めているが、民達に嫌われているのか？と言うとそうではない。

寧ろ好かれている。

それをこの頭がとち狂った男は理解できないようだ。

それに気付かない男は飛天を血祭りに上げようと意のままに動く兵士を使い殺そうとした。

そして私が探していた娘をどういう訳か見初めて自分に相応しい妻にしようとしていたらしい。

迷惑ばかり掛ける男ね。

「どうだい？君も解るだろ？世の中が平和になれば皆が幸せに暮らせるんだ」

男の問い掛けに私は飛び切りの笑顔でこう言ってやった。

「平和なんて糞くらえよ」

第五章：平和なんて糞喰らえ

「平和なんて糞くらえよ」

「何故だ？なぜ解ってくれないんだ？」

男は私の言葉を聞いて信じられないとばかりに絶叫して私を見た。

「なぜ平和を望まないんだっ」

男の言葉に私は笑って答えた。

「私は平和なんかより危険を愛する女なの」

「・・・・な、・・・・・・そんな・・・・・・・・馬鹿な！！」

男は脱力したように膝を着いた。

「平和って虫酸が走るのよね。特にあんたみたいに自己陶酔し切った理想主義者が吐く平和ほどね」

私は男を見下ろして新たなゴロワーズに火を点けた。

「そんな、・・・・・平和を望まないなんて・・・・・・・・・・」

男は傀儡のように呆然としていた。

娘は男が呆然としている間に私の元へと走って来た。

「何だ？そいつ頭が本当にイカレタのか？」

飛天がモスバーグを片手に現われた。

「えぇ。私が平和なんて“糞くらえ”って言ったらイカレていた頭が更にイカレチャったの」

「・・・平和か」

どうでもよさそうに飛天は呟くと夜歩くを取り出して火を点けた。

「確かに平和なんて“糞くらえ”だからな」

飛天の言葉に男は正気を戻したのか睨んで大声を上げた。

「ふざけるな！！この人殺しが！！」

「貴様らは屑だ！人の命を何とも思わないで生きる最低の人間だ！！」

飛天は何も言わずに黙っていた。

私としては男の耳障りな声など聞きたくもなかったが雰囲気から聞く事にした。

「世界中が平和になれば皆が幸せに暮らせるんだ。誰も傷つかずに幸せな生活を送れるんだぞ！！」

「・・・・青臭い演説だな」

飛天は皮肉気に嗤った。

「平和なんて物は人間が存在する限り叶う事は無い。仮に平和が訪れても破滅の道を歩むだけだ」

「黙れ！！この悪党が！！」

男は飛天に殴り掛かろうとしたが飛天はモスバーグで男の両膝を撃ち抜いた。

弾は１２ゲージなのか、幾つもの散弾が飛び散り男の両膝に当たりグチャグチャにした。

娘は私の背中に隠れて目を瞑った。

「ぎぃ・・・・・ぎぃぃぁあああっ！！」

「・・・力も無いくせに粋がるな」

飛天は胸糞悪いとばかりに膝に手を当てる男の顔を靴底で踏み付けた。

「貴様のやった事は他人の気持ちを踏み躙った。俺らと同じ糞だ・・・いや、それ以上の糞だ」

「違う！！私は平和を思ってこそ・・・・・・・・」

「偽善者は何処まで行っても偽善者でしかないな」

男の話しを打ち切る形で飛天はモスバーグのスライドを引いて空薬

莢を排出した。

赤い空薬莢が外に出て地面に落ち乾いた音がする。

そして飛天は引き金に人差し指を掛けた。

「・・・じゃあな。偽善者。今度は犬の糞にでも生まれるんだな」

「待ちなさい！！飛天！！」

飛天が引き金を引こうとした時にラファエルが現われた。

「・・・何の用だ？売女が」

飛天はここで無愛想でラファエルを見た。

正確に言えば睨んだ、と言った方が良いわね。

しかも声が地を這う蛇のように生々しいと言えば良いかしら？

殺気立っている。

飛天に睨まれたラファエルは怖気づいた顔つきをした。

そして同時に悲しそうな顔を浮かべた。

・・・ふざけているの？

あんたにそんな顔をする権利は無いわ。

飛天の幸せをブチ壊した挙句に地獄へと付き落としたあんたに・・・・・・・・・・・・・

「彼は・・・平和を望んでいたからこそ行動を起こしたのよ。彼の行なった事は“正義”よ。正しい戦いだったの」

大量の血を流す男を悲しそうに見るラファエル。

「おぉ、天使よ。我が愛しい天使よ。私を・・・私を助けて下さい」

男は飛天の靴底から脱出すると地を這ってラファエルの所まで行くと助けを求めた。

ラファエルは男を抱き寄せようとはしなかった。

膝を曲げて手を伸ばそうともしなかった。

「どうしたの？あんたはその男を正義の為と称したわ。なら、正義の味方である天使のあんたはその男を女神みたいに抱擁して慰めたら？」

「・・・この身は、神に・・・いえ。飛天に捧げているわ」

だから、誰にも触れさせない、とラファエルは言った。

「そ、そんな・・・・・・・・！！」

男は飛天に身体を捧げている、とラファエルが言うのを聞いて絶望した。

一体何度目の絶望かしら？

でも、あんたの絶望なんて高が知れている。

底が見えてるわ。

この男の・・・飛天の絶望は底が見えない。

何処までも落ちて、落ちて、落ちて行く。

それに比べれば可愛気がある絶望だわ。

「随分と酷いわね。助けに来たと思ったら突き放すんだから」

私はゴロワーズを吸いながらラファエルを詰った。

「違うわ！私は突き放してなどいないわ！現にこうして彼を助けに来たわ！！」

ラファエルは私の言葉を・・・大声を上げて否定した。

「だったら、抱き締めて天国へ連れて行きなさいよ。楽園へ連れて行って傷を癒して上げなさいよ」

「それは・・・・・・・・・」

ラファエルは私の言葉に先が言えないのか黙った。

「・・・下らない」

飛天は吐き捨てるような口調でポツリと言った。

「正義？正しい戦？ふざけるな。そんな物はこの世に存在しない」

ギロリと左に宿された月の眼でラファエルを睨む飛天に私は少しだけ怯えた。

また・・・戻るの？

以前の貴方に・・・・・・・・・？

「正義が悪を滅ぼすんじゃない。悪を潰すにはより強大な悪で滅ぼしかない」

そして最後は・・・・その強大な悪も倒されて終わり。

貴方もそうなの・・・・・・？

そうなりたいの？

飛天・・・・・・

私は心の中で飛天に問いを投げた。

「口先だけの偽善者の言葉など胸糞悪いだけだ」

飛天はラファエルにモスバーグの銃口を向けた。

ラファエルは飛天に銃口を向けられて怯んだが、それでも真っ直ぐに・・・汚れの無い瞳で飛天を見つめ返した。

それが嫌に胸糞悪くなった。

「・・・・飛天の言う通りね」

私は短くなったゴロワーズを吐いて捨てると靴の底で揉み消した。

「偽善者の言葉なんて聞いていて気分が悪くなるだけね」

空になったドラムマガジンを捨て新たにドラムマガジンを装着してラファエルに狙いを定めた。

「ガブリエル！！」

ラファエルは私にも銃口を向けられてうろたえた。

「この男がした事は明らかに“悪”よ。しかし、それを“善”として自分の行いを正当化する偽善者・・・・こんな人間は死んで当然。こいつのせいで人生を狂わされた者もいるのよ」

「・・・・・・・」

ラファエルは何も言わなかった。

何も言えなかったのよね？

私が言っている事が正しいと理解しているから。

そうでしょ？

偽善者ラファエル様。

私の頭に幸せな家庭を築こうと約束した男と女がこの男にナイフでめった刺しにされる場面が浮かんだ。

現場を見ていた訳ではないが、想像は出来る。

幸せな家庭を築こうとした二人の人生を狂わせておいて何が正義よ。

何の為の平和よ！！

誰かを犠牲にする平和など“糞くらえ”よ！！

「こいつには復讐されるだけの怨みがあるわ」

「そんな事をしたって無意味だわ」

「無意味なんてこの世で存在しないわ」

どんな行動や言葉にも必ず意味があるが、それを知らない愚かな人間は無意味と決めつけている。

どんな行動や言葉にも必ず意味がある。

でも、この男に関してはそれが無い。

あるのは自己陶酔と腐った卵のような性根と欲望だけ。

「ガブリエルの言う通りだ。この世に無意味など存在しない。こいつが殺されるのも、俺がこいつを殺すのも意味がある」

そう言って飛天はラファエルの足元に居る男に向けていたモスバーグの引き金を躊躇いもなく引いた。

散弾が男の身体を突き抜けて中身を壁にぶちまけた。

当たり一面血の海のようになった。

至近距離に居たラファエルは諸に男の血を全身に浴びた。

ラファエルは飛び散った血を物ともせず・・・ただ悲しそうに男の死体ではなく飛天を見つめた。

しかし、飛天はラファエルをちらりとも見ずに背を向けた。

「・・・・じゃあな。売女。せいぜいそこの糞と一緒に抱き合って糞の子でも孕むんだな」

「飛天・・・・私は、貴方が・・・・・・・・・・・・！！」

ラファエルは何かを言おうとしたが飛天はそれを背中で黙らせて今度こそ去って行った。

私も震えている娘を引き連れて飛天の後を追って飛天の部下が船で迎えに来て島を後にした。

帰り道の船上で飛天は無言だった。

ただ無言で煙草を蒸かしていた。

娘は未だに怯えており飛天の部下が温かいミルクを差し出しながら恐怖を取り除いている。

それを尻目に私はラファエルが飛天に何を言おうとしていたのか、と考えた。

考えなくても分かっていた。

あの女は飛天を愛している。

愛しているが故に起こした悲劇、とあの女は言うでしょうね。

“小娘”の方は愛しているが故に彼を滅茶苦茶にしたかった、と言うでしょう。

どちらも胸糞悪くて同族として嫌悪感しか出ない。

『・・・何時か、何時の日かあんた達2人を纏めて殺して上げるわ』

飛天にした時のように・・・されたような凄惨な・・・残酷な・・・冷酷な・・・お返しを、ね・・・・・・・・・

港へと戻った私達は、娘をどうするか？思案して一時的にだが飛天が預かる事に決まった。

しかし、私は飛天に用が、飛天は私に用があるため娘は部下に預けさせた。

飛天と私は互いに無言で歩き続けた。

何時の間にかベンチャーストリートに来ていてそこを歩く。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

互いに何時まで経っても無言だった・・・だけど、飛天は行き成り立ち止まると振り返って私の腕を引いた。

飛天は私の唇に自身の唇を重ねた。

私もまた彼の唇を甘んじて受け止める。

それからは求め合うようにホテルに行き朝になるまで互いを貪りあった。

飛天と唇を合わせていたが

僅かに・・・塩を味がした。

この都を包む霧のせい？

それとも・・・・・・・・・・・・・・・

エピローグ：シルバー・ブレッド

島の一件から3ヶ月が経った。

あれから娘は両親とは会いたくないと言ったので私は娘の意志を尊重して両親には娘は国外に行ってしまったと伝えた。

能無しだとか役立たずとか罵詈雑言を言われたが言われる筋合いは無い。

何よりどうもその時は私の癇に障ったから両親に平手打ちを一発ずつお見舞いして事務所から叩き出してやった。

それから娘は以前に襲撃されたスペイン料理屋の住み込みで働き始めた。

仕事は大変だと言っていたが、それでも両親から解放されて嬉しいと言っていたので良しとしようじゃないの。

もちろん飛天の口添えで店主を納得させてからだけどね。

私と飛天はというと相変わらず何も変わらずに過ごしていた。

今夜も例のＢＡＲで夜の午前零時に待ち合わせをしている。

私はこの前と同じく血まみれマリーを飲みながら左腕に嵌めたオメガのスピードマスターを見て飛天を待った。

きっかり午前零時になると同時にドアが開き飛天が中に入って来た。

「・・・・マンハッタンを」

飛天は何時ものカクテルを頼み私は新たにカクテルを頼んだ。

出されたカクテルはシルバー・ブレット。

どんな怪物でも一発で仕留める銀の弾丸。

そして私が飛天に依頼を頼む暗号。

「・・・仕事か」

マンハッタンを飲みながら飛天は私に尋ねた。

「えぇ。今度はちょっとした狩りよ」

私は楽しさを隠し切れずに笑顔で言った。

ロンドン郊外にある辺鄙な私立探偵事務所が私の住まいだ。

何で天使が人間界で探偵などをしているのだとよく言われる。

その答えは決まっている。

『スリルを味わいたいからよ』

コルト・パイソン（前書き）

画像と共に軽い説明も一緒に載せておきます。

私もこれをラスベガスで撃ちましたが・・・確かにS&Wのリボルバーに比べると些か撃ち難い気がしました。

ですが、腐ってもパイソン。

見栄えなどは見劣りしないし・・・やっぱり格好良い！！

コルト・パイソン

＞i２９１９８―１６２３＜

製造年：１９５６年

製造国：アメリカ

全長：２４１ｍｍ

重量：１０９２ｇ

口径：３５７マグナム

装弾数：６発

要約：アメリカの老舗銃器メーカーであるコルト社が１９５６年代に開発した６連発式リボルバーで高級リボルバーとして名を馳せた。

長さは初めに６インチ、次に２．５インチと４インチの銃身が発売され後に８インチである「パイソン・ハンター」が発売された。

続いてコンバット・シューティングモデルである３インチモデルが発売される事となった。

職人技が光った仕上げとなっており深みのある青を帯びた黒が特徴で「コルトロイヤルブルーフィニッシュ」と謳われた。

また内部に関しても熟練工の職人技が光輝いておりコルト社が開発

した他のリボルバーに比べてトリガーフィーリングは良かったと言われている。

ただし、８０年代になるとこれを作り上げてきた熟練工が退職し始め質が落ち始めてしまった。

またコルト社のトリガー機構はライバル社であるＳ＆ａｍｐ；Ｗに比べて古い事もあり幾つかの欠点もあった。

コルト社は１９９９年１０月に同モデルの生産を終了した。

だが、受注生産はしており「パイソン　エリート」と言う名で生産は続けている模様。

私立探偵であるガブリエルはこれの４インチモデルを愛銃としている。

仕上げの良さなどから恐らく初期のモデルと思われる。

モーゼルM712（前書き）

今度は伯爵の愛銃を紹介します。

何でも20発入りの弾倉モデルはかなりレアらしく、コレクターの間ではかなりの値段で取引されている模様です。

雑談終わり・・・どうぞ！！

モーゼルM712

＞i29224―1623＜

製造年：1931年

製造国：ドイツ

全長：288mm

重量：1240g

口径：7．63mmx25

装弾数：10発だが、20発のロングマガジンもある。

要約：1896年にドイツの老舗銃器メーカーであるマウザー社が開発したC96をフルオートが可能にしたモデル。

この銃の特徴はストックが標準装備されてるという事だが、木製でそれをグリップの後ろに取り付ければカービン銃として使用可能という所。

しかし、拳銃で長距離を狙うなど論外に等しいためあくまで補助的な役割を担っていたと思われる。

またドイツではついに正式採用されずに代わりに他国で正式採用されたりして、その挙句に様々な口径モデルも誕生した。

グリップを止めるネジ以外は1本も使用せず分解も可能であるが、余りに複雑な形をしているためか扱いには相当な練習が必要でもある。

グリップは小型のためアジア系の民族からは愛用され馬賊などもこれを愛用していたとも言われている。

伯爵のモーゼルは本家であるマウザー社が開発した純正品であるがグリップが大型にされているなど僅かながらに工夫されている模様。

通常、伯爵はこれを腰のホルスターに入れて持ち歩いている。

モスバーグM590（前書き）

今日はモスバーグを載せます。

いやー、これは私の好きなショットガンで他の作品にも出す積りですのでよろしくお願いします！！

モスバーグM590

>i29439—1623<

製造年：1970年

製造国：アメリカ

全長：1041mm

重量：3．29kg

口径：12ゲージ

装弾数：9発

要約：1970年代にアメリカのモスバーグ社がM500をベースに軍用に開発された。

主な特徴として強化されたレシーバーと火傷防止のヒートシールド、バヨネットラグを備えており工具無しで分解可能な所も上げられる。

アメリカではハンティングから自衛用、警察から軍隊まで幅広く使用されており採用方式もポンプアクション式とオードソックスである。

序章：母の願い（前書き）

一度は完結させ改稿した物語ですが、続編というかここで物語を継続する事に決めました。

序章：母の願い

煙草の煙で薄黄色に汚れた天上にまた煙を吐きながら私は目の前で真珠を流す中年の女性を見つめた。

平凡な家柄と判る衣服を身に纏っているが・・・黒一色という異例の衣服。

これを見れば子供でも何がこの女性に起きたのか・・・理解できるでしょ？

「娘は・・・私の・・・娘、カレンはまだ15歳でした」

女性は震える声で最愛の娘の名前と年齢を私に伝えてきた。

「人生、これからという年齢ね」

私は灰を灰皿に落としながら相槌を打った。

15歳ともなれば高校進学を控えた歳だし思春期にも入る。

本当に人生これから、という歳だ。

「それなのに・・・娘は、もう天に召されてしまいました」

病気、事故なら・・・・まだ納得できるでしょうね。

酷い言い方だけど、誰にだって死は訪れる。

決して逃れる事は出来ない。

遅いか速いか。

それだけの違いでありどうやって死んでしまうかの違い。

でも・・・それが何処の誰とも分からない“糞野郎”に殺されたら納得できない。

「娘は、何の罪もありません」

女性の言葉に私は無言で煙を吐いた。

「娘は、ただ人助けをしようとして・・・殺されたんです」

この女性の娘は、雨が降っていた日に学校に一人で歩いて向かっている途中に誘拐された。

目撃者の話ではベージュのバンが彼女の前に停まり道を尋ねていたという。

それがいけなかった。

直ぐに後部座席が開き、強引に中へと連れ込まれ攫われた。

女性は直ぐに警察ーーースコットランドヤードに助けを乞い直ぐに犯人は逮捕された。

犯人は男女の２人。

２人は夫婦“だった”わ。

逮捕の決定打は女が警察に自首した事。

夫にＤＶ－－－家庭内暴力を受けた上に殺人の手伝いをされた、と言い司法取引を申し込んだ。

警察は手掛かりもなかったから女の取引に応じた。

それによって男は逮捕され遺体も見つかった。

全部で３人。

１人はバラバラにされた上に身元が分からないようにガソリンで焼かれた上にコンクリートに埋められて湖に捨てられた。

１人は全裸でテムズ川に浮かんでいた。

遺体には陵辱された形跡があり尻には蝋燭が突っ込まれていた上に尻にはスペルが間違いだらけの「混沌を」が書かれていた。

１人は酒を大量に飲まされた上にガソリンを頭からかけられて生きたまま火で焼かれた。

そしてそれを器用にバラバラにして被害者の自宅へ送り届けた。

まったく殺害方法などもバラバラで警察としては同一犯とは考えていなかったらしいけど、女がぜんぶ夫がやったと供述した事で終わった。

夫は表では真面目な会計士と言われていたが、裏では麻薬の密売をしていた上に殺人映画ーーースナッフ・ムービーを撮っていた。

それが実在していると女は語り警察に場所ーーー犯行現場である自宅の地下室を教えたがそこには何も無かった。

あったのは血の痕と夫である男の指紋だけ。

これを聞けば頭の良い人はある程度の考えが浮かぶでしょ？

・・・・・女が夫一人に罪を擦り付けて自分は刑を軽くしようとしている、と。

それは見事に的中。

既に司法取引は終えていたから覆す事は出来ない。

夫はイギリスの最高刑である終身刑が下された。

でも、終身刑とは言え仮釈放がある。

それに幾ら夫に強制的にやらされたとは言え、妻である女もまた共犯。

司法取引をしたから懲役5年。

随分と軽い罰と思うわ。

既にその女は仮釈放の身となり娑婆の空気を思い切り吸っている。

夫の方もまた同じ。

終身刑を言い渡されたが、規律態度は良く仲間の“昔話”を看守にチクッてはポイント稼ぎもした。

直ぐに模範囚となった末に釈放されたわ。

つい先日ね。

そして2人が釈放されたのを機に弁護士が預かっていたビデオ・テープを公開した。

そこには2人が被害者を陵辱する所が鮮明に映し出されていた。

女は夫に強要されたと供述していたがビデオを見る限りそれは嘘っぱち。

被害者の3人の内1人は血を分けた実の妹。

尻に蝋燭を突っ込まれた上に「混沌を」と書かれた死体がその子。

市民達は直ぐに憤って再び逮捕しろ、と訴えたけど罪はもう償った。

だから、逮捕できないのが現状。

それを納得しろと言う方が土台無理な話。

被害者から言わせれば当然。

法が裁けないのなら・・・・・・・・・

「娘を・・・娘の仇を取ってください」
女性はテーブル越しに私の手を勝手に掴むと力一杯握り懇願して来た。
「悪いけど、私に依頼するのはお門違いよ」
私は私立探偵で殺し屋ではない。
こんな依頼はお門違いという他ないわ。
「で、でも、貴方は、“伯爵”と知り合いなのですよねっ」
伯爵・・・・・・・・
「えぇ。だけど、それがどうだと言うの？」
「お願いです。私の代わりに伯爵に頼んで下さいっ」
「それもまたお門違いよ。何で私が貴方の代わりに頼まなければならないの？」
自分の足があるのだから、自分で行けば良いのに。
「私は、伯爵と面識がありません。ですから、知り合いである貴方に・・・・・」
「あの男（ひと）は初対面の人間だろうと会うわよ」

あまり彼には会いたくない。
嫌いとかの理由ではない。
今は６月。
彼にとっては後悔と懺悔の月であり“あの２人”にとっては歓喜と狂気の月である。
私もまた彼と同じく後悔と懺悔の月・・・・・・・
「でも、不安なんですっ」
確かに不安なのも解かる。
伯爵と呼ばれる彼は暗黒街では誰もが平伏し畏敬の念を抱く男。
逆らう者は皆殺しで全てを焼き尽くす悪魔の化身と言われている。
悪魔の化身と言われているけど実際は悪魔なのよね。
そんな噂の男に一人で会いに行けと言われても大抵は無理、と言うでしょうね。
娘の仇を討ちたいと願う女性であり母親でもそれは同じ事。
だから、知り合いである私を仲介人に立ってもらいたい。
「お願いですっ。私の宝である娘の仇を討って下さい！！」

女性はテーブルから離れると土下座した。
床に額を擦りつけて・・・・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・」
私は携帯を取り出してある所へ電話を掛けた。
出てくれると良いけど・・・・・・・・・・・・
『何の用だ？』
電話越しから無愛想な声が返ってきた。
居るのは外の何処かだろう・・・・雨の音が激しく聞こえてくる。
「今から会いたいんだけど大丈夫？」
でも、私はそれを考えないようにして要件を伝えた。
『何処で』
「貴方の家でどうかしら？」
『分かった。直ぐに迎えを寄こす』
「ありがとう。少し貴方の力を借りたいの」
『・・・母親の願い、か』

未だに啜り泣く女性であり母親の声を彼は聞いて私に言ってきた。

「えぇ。詳しい事は本人の口から説明させるわ」

『分かった。本人にとっては辛いだろうが本人の口から聞きたい』

それじゃ、と私は言って携帯を切った。

「今から伯爵の迎えが来るわ」

女性であり母親は顔を上げた。

未だに真珠は流し続け眼元が腫れ上がっている。

「ほ、本当に・・・本当に、来て、くれるんですか？」

「えぇ。あの男は約束を守るわ。大丈夫よ」

それを聞いた母親であり依頼人である女は子供のように泣き伏せた。

そんな彼女に私は語り掛ける。

「貴方は・・・幸せよ。願いを叶えてくれる人が傍に居る。そして・・・真珠が枯れないんだから」

あの男（ひと）には・・・飛天にはもう真珠は流せないのだから。

あの時・・・誰もあの男に手を差し伸ばしてはくれなかった・・・

遅れて私が差し出したけど、果たしてそれで良かったのかと疑問に思う時はあるが。

そんな誰にも助けてもらえず真珠も枯れ果てた飛天が貴方の願いを叶えてくれるのだから・・・幸せよ。

数時間後・・・私と女性であり母親は飛天がくれた迎えの車に乗り込んでフランスの港湾都市ーーーマルセイユへと向かった。

第一章：伯爵の家

フランス一の港湾都市ーーーマルセイユ。

ここには多くの船と新鮮な魚が毎日のように陸揚げされては市場に売られている。

だから、人込みも半端ではない。

そんな所を一台の車が通り抜けるんだけど、その時は皆が一様に止まり視線を向け一礼してくる。

「相変わらず堅苦しいわね」

私は助手席で煙草ーーーゴロワーズを吸いながら窓から見える風景にうんざりした。

「そう言われましても・・・伯爵様もするなと言っても聞かないんです」

運転手は心底困り切った顔をして答えた。

「飛天の言う事を聞かない？」

普通なら聞く筈なのに。

どういう事？

「何でも伯爵様はここの領主。その領主が所有する車が来るのだか

ら頭を下げるのは領民としては当たり前だそうです」
領主、ね・・・・・・
「まぁ実際、領主と言われても間違いじゃないわね」
ここにあの男(ひと)は何年、何十年、何百年も住んでいる。
誰か忘れたけど時の王に頼まれたらしいわ。
『何卒・・・この地で暮らして下さい』
何でここなの？と思うけどここは海が隣接している。
となれば敵が上陸する。
それを考えて飛天をここに住まわせたのかもね。
飛天が居れば人間が何人挑もうとゴミみたいに殲滅できるんだから。
でも、他にも理由があるとすれば・・・・・・・・・・
『この壮大な海の景色を貴方様に送ります』
的な感じかしら？
などと私は考えながらゴロワーズを灰皿に捨てた。
「あ、あの、伯爵様は、何処に・・・・・・・？」

女性であり母親そして私の依頼人が緊張した顔で私に尋ねてきた。

「あそこよ」

私はフロントガラス越しに丘の上に建つ白い屋根が特徴的な家を差した。

「あそこに・・・・・・」

「えぇ。周りからは白い家と言われているわ」

そのまんまだけど、ね。

「あそこに伯爵が・・・・・」

「その様に怖がらなくても大丈夫ですよ」

運転手が依頼人を落ち着かせるように話し掛けた。

「あの方に仕えてまだそれほど時間は経っておりませんが、あの方は噂で聞くほど恐ろしい方ではありません」

女子供には優しく職が無い者または就けない者には仕事を与える。

麻薬と人身売買は何があろうと手を出さない、持ち込ませない。

「現にここで麻薬と人身売買に殺人らの凶悪事件は起きておりません」

起きたとしても数日後には犯人が逮捕されるか死体で見つかる。

「それを伯爵が？」

「えぇ。本人は何も言いませんが、あの方は麻薬と人身売買を心の底から憎んでいるんです」

殺人も許さないという一見正義の味方に見えるが、そこはあの人。

気に入らなければ・・・敵対していれば・・・欲望に溺れていれば・・・など理由を上げれば枚挙に暇が無い。

でも、どんな理由だろうと犯罪を抑制している事に変わりは無いのよね。

特に麻薬売買と人身売買には苛烈なほど怒りをぶつける。

情け容赦なく徹底的なまでに・・・・・・・・

「貴方の事はシンシア様から聞いておりますが・・・伯爵様が願いを叶えて下さいますよ」

犯人を血祭りに上げる、と運転手は語った。

「・・・・・・・・」

依頼人はギュッと拳を握り締めた。

私はそれを見ながらゴロワーズを灰皿に捨てた。

そして白い丘にある家へ到着した。

黒い門の前には一人の男が立っている。

黒い長髪を腰まで伸ばしているが、それを1本に纏めた髪型。

東洋と西洋が混ざり合っている彫が深い顔立ちに金色の瞳は女なら誰だって心ときめくほど綺麗だった。

右目に付けた黒い眼帯が更にそこへミステリアスを醸し出し刺激する事だろう。

「久し振り。飛天」

私は目の前に立つ男ーーー飛天に近付いた。

「そちらが依頼人か」

飛天は私の後ろに居る女ーーー依頼人を左の眼で射抜くように見つめた。

依頼人である母親であり女は飛天を黙って見つめ返した。

もう後が無い、という眼で・・・・・・・・・

「ご苦労だったな」

飛天は運転手を労う言葉を投げた。

「いえ。では、私はこれで失礼します」

「あぁ。二人とも入れ」

飛天は背を向けて私と依頼人を家の中へと入れてくれた。

家の中はとても綺麗に掃除されており汚れ一つ見当たらない。

その上何気なく飾られている絵画などはどれも一流画家や職人が丹精込めて作り上げた物ばかり。

私の事務所兼自宅とは豪い違いだ、と思いながら飛天の背中を見た。

大きな背中・・・でも、真っ黒で先が見えない。

彼が歩み続ける道は暗闇。

何処を行っても光なんて無い。

最後もまた・・・・・・・・

居間へと通された私と依頼人はソファーに腰を降ろした。

「飲物は？」

「コーヒーをブラック」

貴方は？と依頼人に訊ねると同じ物をいう答えが返って来る。

飛天は直ぐにコーヒーを淹れてくれた。

その間・・・母親であり女である依頼人は忙しなく周りを見ている。

緊張しているのは解かるが、もう少し落ち着いて欲しい。
などと考えながら私もまた部屋を見回す。
色は全体的に明るいが、白は何処にも見当たらない。
無意識なのだろうか？
白＝天使を意味する。
それを彼は嫌がっているのかもしれない。
不意に私の脳裏に前に言われた言葉が過る。
『他人とは組まない』
彼は私を抱き、私は彼に抱かれた。
他人ではない・・・と思うのは、私の女々しさ？
ううん・・・違う。
彼は・・・飛天は、一人でケリを着けようとしている。
だから、敢えて私を他人と称してあまり近付けさせないのかもしれない。
そう思っている間にコーヒーを出された。

飛天は向き合う形で一人用のソファーに腰を降ろしたが、何も言わなかった。

目の前に座る依頼人から話すのを待っているのだろう。

依頼人はコーヒーを黙って見ていたが、ふいに言葉を紡ぎ始めた。

「娘は・・・私の娘カレンはまだ15歳でした」

人生これからという年齢。

「高校も決まってこれから新しい学校生活を始めようとした矢先に・・・殺されたんです」

欲望に溺れた2人の罪人に・・・・・・・

「俺に何を望む・・・・？」

飛天が初めて声を発した。

何処までも平淡で感情が込められていない声だけど、母親であり依頼人でもある女性は気にせず要件をハッキリと口にした。

「娘を・・・カレンの仇を討って下さい」

娘がされたように・・・された以上に・・・罪人を罰して下さい・・・・・・

「罰する、というのは法に従う者が言う台詞だ」

俺は法に従っている訳ではない・・・・・・・・・

飛天はそう言い更にこう言った。

「俺は裁判官でも弁護士でも検察官でも警察官でも無い・・・・・・・」

法の網を掻い潜り罪を犯す者。

「その俺に法を尊重した罰を与えろと言うのか？俺は先ほども言った通り司法界の者じゃない」

「・・・・・・・・・・・・・・・娘の人生を台無しにした罪人を・・・・殺して下さい。八つ裂きにして下さい」

依頼人は言葉を改めた。

飛天に嘘は言えない。

・・・嘘を吐かず自分の気持ちを正直に伝えた。

八つ裂きにして下さい・・・四肢を獣に喰わせて下さい・・・奴等の脳味噌を盛大にぶちまけて下さい・・・・・・・・・・・

「娘を殺した罪人を私は許せません」

「・・・・・・・・」

どうか、どうか、どうか・・・・・・・・・・・どうか・・・・・・・・・・・・・

「私の願いを・・・怨みを晴らして下さい」

貴方に願いをする事で地獄に堕ちるのであれば構いません。

「娘は・・・天国に行くでしょう」

それで私が地獄へと堕ちるなら構わない。

「・・・分かった」

飛天は静かに了承した。

――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――――

「・・・これからどうするの？」

私はベッドの上で飛天の胸に顔を預けながら訊ねた。

あれから依頼人は飛天の部下が用意したホテルまで送り届け私は彼の家に泊る事にした。

「先ずは依頼人の娘を殺した罪人の過去を調べる」

飛天は私を見ず天井を見上げながら素っ気ない声で答えた。

何時も・・・そう・・・・・・

無人島の一件の後、私は彼と燃えるような時間を過ごした。
でも、彼は何時も私を見ないで天井を見上げている。
私を見るのは・・・抱く時だけ。
その瞳ーーー金色の瞳は、何時も無愛想。
私は貴方をこんなに燃えるような眼差しで見ているのに、貴方はどうしてそんな無愛想な瞳なの？
「・・・そう」
飛天の胸に預けた顔を退かして上半身を起こした。
「彼女は・・・幸せね」
貴方という悪魔に願いを言えたのだから。
涙が枯れていないのだから。
「・・・そうだ、な」
彼は私の腕を掴むとまた自分の胸へ戻した。
私は彼の胸に顔を預けながら時計のように正確な鼓動をする胸に顔を強く押し付けた。
貴方の身体に私の匂いを残したい。

僅かな間だけでも・・・この瞬間だけでも・・・・・・・・

第二章：雨が降る

私は彼の運転する黒い車ーーーＢＭＷ車に乗りながらマルセイユ警察署へ向かっていた。

彼は私に罪人の過去を調べるとベッドの中で言っていた。

イギリスの警察であり事件を担当したスコットランド・ヤードに行けば良い筈だがわざわざ資料を取り寄せたらしい。

「何でわざわざ取り寄せたの？」

私が訊ねると彼は夜歩くを吸いながらこう答えた。

「勝手に取り寄せられたんだ」

「つまり部下が勝手にやったと？」

「違う。署長がやった」

ここの署長が？

あー、何か思い出したわ。

マルセイユ警察署の署長は今年で５９歳になる。

後１年で愛でたく退職と言う歳にここの署長になった。

運が悪い・・・良いと言えば良いかしら？

飛天が住むここを護る役目を仰せ付かったのは光栄である半面で厳しい。

何か問題ーーー飛天の身に何か遭ったなんて日には首が胴から跳んでしまうから。

本当に首が胴から跳ぶのよ？

もう直ぐ退職だと言うのに豪い所に行かされたものだわ。

本人は第二の人生を過ごしたいからどんな些細な事でも見逃さず飛天の力になる。

ならないと後が面倒だし怖いからね・・・・・・・・・

そんな過度なほど神経質な署長だから、今回の事も聞き付けて強力しようと思ったんでしょうね。

「署長を怒る？」

頼んでもいないのにやるんだから。

「いいや。あいつは俺の力になりたい一心でやったまでだ」

怒るなど筋違いだと飛天は言うけど、じっさい私なら怒るわ。

親切心でやった事でも本人からしたら大きなお世話って事もあるんだから。

まぁ・・・飛天だから許すんでしょうけど。

それに署長の心労を考えると強くも言えない・・・ただ、少々急ぎ足過ぎたけどね。

マルセイユの警察署の前に車を停めた私と飛天は直ぐに署の中へと入った。

誰もが私と飛天に視線を向ける。

そして・・・・・・・・・・・・・

「は、は、はははは・・・・・・・伯爵様っ」

ドタバタ・・・ガシャン！！

喧しい音を立てながら階段を転げ落ちるツルツルの頭をする男――署長。

コメディ映画に出れば主役間違い無しの登場だわ。

「そんなに急がなくて良い」

飛天は軽く溜め息を吐きながら署長を立たせた。

「き、今日は、どのような御用事、でしょうか？」

脂汗もとい冷や汗を掻きながら署長はハンカチで顔を拭いて訊ねてきた。

拭いたのに直ぐ汗は噴き出すからハンカチ一枚では足りずに予備を3枚も持っている事から、このコメディ映画の主役を務められる署長の性格を物語っていると思う。

「取り寄せた資料を見せてくれ」

そんな署長を尻目に飛天は要件を述べた。

「か、畏まりました！では、こちらへ！！」

署長は何も怒っていないのに、酷く狼狽しながら私と飛天を署長室へと案内した。

『署長・・・あんなに慌てる事ないのにな？』

『伯爵様を怖がるのも無理ないけど、あそこまで行くと逆に気分悪くなるぞ』

『幾ら定年前だから神経質になっているとは言え・・・異常だよな？』

『あぁ。あれじゃ殺される前に心労で死んじまうぞ』

『孫が産まれてこれから第二の人生って言うのにそれじゃあんまりだぜ』

『だから伯爵様も気にしているらしいぜ』

後ろから署員の小声が聞こえてくる。

好き勝手に言っているけど、心配している所を見るとそれなりに敬愛されている様子ね。

見た目からは想像も出来ないけど・・・・・・・・・・

署長室へと通された私と飛天はソファーを勧められたので座った。

直ぐに美人な女署員が私と飛天にコーヒーを出してくれた。

飛天のティーカップにはミルクが添えられている。

「相変わらずブラックは嫌いなの？」

「・・・嫌いじゃない。最初はブラックで飲むがそれは一口だけ。後はミルクを入れる」

それが悪いのか？と些か機嫌を損なったのか・・・ぶすっ、とした声で言って来る飛天。

そんな彼の様子を見て署長は自分の事のように「ひぃ」と悲鳴を上げた。

「何でお前が悲鳴を上げる？」

飛天は左の眼―――金色の瞳で署長を見たが・・・署長には「蛇に睨まれて動けない蛙」だった。

「い、いえ・・・その、あの・・・・・・」

「失礼します・・・伯爵様。資料をお持ちしました」

署長が答える前に先ほどの女署員が飛天に茶色の封筒を渡してきた。
だが・・・白い紙が出ている事を私は見逃さず取り出した。
素早く眼を通す。
電話番号が書かれ自宅の住所まで書かれている・・・・・・・
「忘れ物よ」
「伯爵様に見てもらいたいのです。それから勝手に封筒から取らないで下さい」
女署員は私を真正面から見て答えた。
明らかに私に対する挑戦とも当て付けとも取れる視線に私は無表情で睨み返した。
それなのに女はまるで気にしていないから無性に腹が立つ。
「・・・後で眼を通しておく」
「飛天」
私は思いも寄らぬ彼の言葉に眼を見張った。
直ぐに紙は取り上げられて飛天はそれを一瞥するとライターで燃やした。

「今の仕事が片付き次第連絡する。何か欲しい物はあるか？」

「特にありません。ただ、夕食をご一緒に取りたいです」

「分かった。場所は俺に任せてくれ」

「ありがとうございます」

女署員は飛天の頬にキスをすると部屋を出て行った。

・・・最後まで胸糞悪い女ね。

「し、シンシア様ッ。あ、あの署員には、私の方からきつく・・・・・・」

署長は私が皺を額に寄せたのを見て慌てて宥めようとしてくる。

「要らないわ」

冷たく突き放すように言った私は飛天から渡された資料を見た。

こちらは女。

「・・・１９ＸＸ年３月９日にイギリスのケント州に誕生」

両親は共働きで妹が一人。

何処にでもある平凡な家庭で生まれ育ったが、ロンドンに来てから

ーーー彼女が１７歳の時に運命の歯車は大きく狂い始めた。

相次いで両親が事故で死亡し幼い妹と共にロンドンで働き始めた。

でも、未成年が定職に就くなど出来る訳も無くその日だけの仕事なんかをしては食い繋いでいたらしいが何時しか薬物に手を出した。

彼女が２０歳の時に夫となる男と出会い半年で“尻を許す”ほどの仲に発展しそのままゴールイン。

美男美女だからベスト・カップルと言われていたらしいが、夫は裏で麻薬の売買などをしており更にスナッフ・フィルムも撮影し販売するという裏の顔があった。

気付いた時には片足どころか首までドップリ浸かってしまいもう逃げられない。

麻薬を買う金も男が与えた事もあるらしいが。

そして妹を命令されたまま殺した。

だが、何時かは捕まると何処かで確信していたらしく弁護士を雇い自分も映ったビデオ・テープなどを預け警察に自首。

夫は逮捕され自分は司法取引をした事で軽い罪に問われた。

刑務所では売女という役割を担っておりレズビアンの奴隷兼ご主人様だったらしい。

相手によって役割を変えるなど刑務所内でも自分の地位を高め確保するなど頭の回転なども極めて速い・・・・・・・

そうでなければ夫に全て罪を擦り付け弁護士に証拠品を預けるなんて芸当できる訳ないわね。

見た目は清楚系だけど・・・意外と悪女ね。

見た目が清楚系なのに中身はどす黒い悪女となれば一人の女が浮かぶ。

あれから会っては居ない。

よほど堪えたのだろうけど、飛天の事は諦めていない筈。

諦めている筈なら当の昔に犬の餌になっているのだから。

などと思いながら私は飛天を見た。

無愛想な顔で資料に眼を通す飛天だが気で怒っていると判る。

「あ、あの、は、伯爵様・・・・・・・・」

署長は息子から小便をちびりそうな程に怯えていた。

「・・・・・・・」

それに対して飛天は無言で尚も話しかけようとする署長を私は止めた。

「いま話し掛けない方が良いわ」

運が悪ければ殺される、と私は続けて言った。

「・・・胸糞悪い」

その直後に飛天は資料を握り締めて呟いた。

「どうして？」

出来るだけ刺激しないように私は訊ねると彼は拳に力を込めて資料を二つにしてしまった。

ボトリと小さな――機械的な――簡潔な音が一回だけした。

「俺の領土で愚かな行いをした事。そして俺自身がそれに気付かなかった事。あの3人以外にも人を殺したという事」

以上3つが気に入らない――胸糞悪いらしい。

「署長・・・・」

ひぃ、と豚のような悲鳴を上げながら署長は「何でしょうか？」と気丈にも訊ねた。

「暫くの間・・・“雨”が降る。何時まで降るのかは分からない。だが・・・お前は何も知らなかった・・・何も知らない」

そうだな？と飛天は署長に訊ねた。

訊ねたというより「頷け」と脅迫している方が正しいわね。

「そ、そ、そそそそ、そうですっ。私は、私は何も知りません！知

りませんでした！！」

「そうだ。それで良い。そうすれば退職後も悠々自適な生活を送れる上に息子達はおろか孫達も幸せに暮らせる」

「は、ははは、はいっ」

署長は顎が外れるくらい何度も頷いた。

「では、俺たちは行くが・・・くれぐれも余計な真似はするな」

「・・・・・・・・・・」

最後には泡を吹いて署長は倒れてしまった。

部屋を出た私と飛天は近くの署員に泡を吹いて倒れた署長の事を頼むと車に乗り込んで・・・・下種野郎と下種女を探しに出掛けた。

その間・・・彼は終始無言で夜歩くを吸い続けて煙が充満したのに気にしないほど怒っていた。

第三章：会計士の行方

私と飛天はフランスの首都であるパリに来ていた。

花の都なんて小奇麗な渾名の通り世界一観光客が多い事で有名だけど、こんな所にも陰はある。

何処にだって光がある場所には陰があるのが普通なのよ。

それが私たちなの。

天使の反対は悪魔。

天使が存在するからこそ悪魔もまた存在する。

逆もまた然り。

どちらかが欠ける事は・・・永遠に来ないでしょうね。

でも、今の時代は科学が主役で私たちは正直に言ってしまえば脇役。

だから、私たちは存在しないし光があるから陰は無いなんていう愚か者は居る。

話を戻すとここは花の都、芸術の都なんて賛美の言葉はあるけど乏しめるような言葉は無い。

それは光しか見ていない証拠であり陰など無いと思っているから。

ここにだって陰はあるのにそれをを知らない馬鹿共は全て綺麗と言う———言っているに違いない。

「まさかフランスに居るなんて驚きだわ」

ヨーロッパに居るのは経歴から考えてありと思っていたけど、まさかフランスに潜伏しているとは驚きだ。

どうやって知ったのか？

そんな事を訊くのは野暮という物よ。

この隣で運転をしている無愛想な男は伯爵よ？

その伯爵が一声かければ何処からともなく情報なんて向こうから来るわ。

しかも、信頼性の高い情報が・・・ね。

で、ここに居るのは男の方。

イギリスの刑務所から出た男は直ぐにイギリスから離れてここへ来たという。

仕事は前職と同じく会計士だけど今回はスナッフ・フィルム———殺人映画と麻薬の売上を計算する会計士。

つまり表の仕事を裏に持って来た訳。

パリもまたフランスの中にあるから飛天の領土となる。

だけど、最近は移民が増えたりとか何とかで飛天の力が及ばない――従おうとしない者共が多い。

愚かな事に飛天を亡き者にしようとしている者も居るから何も言えないわ。

「・・・・・・・・・」

飛天はさっきから私の言葉に耳を傾けようともしない。

よほど腹に来ているのね。

気持ちは解からないでもないけど。

パリの道路を飛天は車を走らせていたが、適当な駐車場に停めると無造作に降りた。

私も一緒に降りて飛天を見る。

何処までも無愛想で顔色一つ変えていない。

一体あなたはどんな時に感情を露わにするの？と問いたくなったが・・・止めたわ。

この男が感情を露わにするのは・・・怒る時。

しかも、生半可な怒りではない。

全てを破壊し焼き尽くす程の怒りの時。

そんな時しか感情を露わにしない飛天に私は哀しみなんて甘っちょろい感情を覚えてしまう。

「・・・行くぞ」

飛天は駐車場から足を動かした。

「何処に行くの？」

飛天の背中を追いながら、その背中に質問する。

「・・・ここで麻薬とスナッフ・フィルムを営む下種が居る」

今は部下達に命じて一網打尽にしていると飛天は言った。

「もうしたの？」

「・・・獲物には逃げられたが情報なら得られるし“掃除”は出来る」

先ずはそこから始めると彼は言ったから既にもう次の手は打ってあるのでしょうね・・・・・・・

何でも卒なくこなすから女として些か憤りを感じるわ。

男が出来ない事を女が・・・相棒がするのに。

この男に相棒なんて要らない、と思う時は偶にある。

でも、彼は決して自分から要らないとは言わない。
私の方から言わせないのよね・・・この男は。
性格が悪いんじゃなくて、自分の行く先をもう決めているから私を遠ざけようとしているのかもしれない。
「・・・不器用な男よね。あなたって」
「・・・・・・・」
私はつい彼の背中に語り掛けたが彼は無言で路地裏へと入り黒スーツに身を包んだ男の居る場所へと足を進め続ける。
黒スーツに身を包んだ男はサングラスを掛けてイヤホンのような物を左耳にしている。
どう見てもＳＰ－－－シークレット・サービスと思うけど、本職はマフィアの私兵なのよね。
階級は“メイドマン”という名で正式な構成員なの。
メイドマンは飛天を見るなり銜えていた煙草を消そうとした。
「消さなくて良い」
飛天は愛想の無い声で言うと彼の持っている煙草の火を借りて自分の煙草に火を点けた。
「・・・ここか」

「はい。中でメイドマンが奴等を“尋問”しております」

「まだ殺していないの？」

メイドマンの仕事の中に殺人がある。

ファミリーが加担する殺人には必ず参加するのが掟だけど、まだ殺していないのはどういう事かしら？

もう既に口を割って遺体を処理している筈と思っていたのに・・・・・・

「口が堅いんです」

もう1時間は経過しているのに未だに口を割らないというから大した男ね。

「お前はここに居ろ」

飛天は私に待って居ろと命令してきた。

「嫌よ。私は貴方の相棒よ。それに母親であり依頼人の彼女の仲介人でもあるわ」

それなら最後まで見届けるし付き合う義務があると・・・義務があるとらしくない口調で言い返した。

「・・・好きにしろ」

飛天はイラついた声で答えるとドアを乱暴に開けた。

「あ、あの・・・・」

メイドマンが顔面蒼白で私に声を掛ける。

飛天が公の場で怒る事は滅多にないから、自分の事で怒っているのでは？と勘違いしても可笑しくない。

「大丈夫よ。少し・・・雨が降ってイラついているの」

「あ、雨？」

「えぇ。雨よ。それはそうと・・・仕事の前に女を抱くのは止めなさい」

何時までもカポ・レジームになれない、と私は言ってからドアを潜った。

カポ・レジーム―――幹部になるにはメイドマンになるよりも難しいとされている。

メイドマンになるには父系がイタリア系の血を引いていて更に警察関係者に親せき筋が居ない事が絶対的とも言える。

その上のカポ・レジームになるには更にボスなどの実力も問われるから生半可な実績ではなれない。

まして仕事の前に女を抱くなどしていたら一生かけてもなれない。

「・・・努力します」

メイドマンは沈痛な顔で頷いたのを確認してから私は階段を登る。

既に飛天は階段を登り部屋へ行く所だった。

飛天に追い付いた私は鼻に血の臭いが付着するのを覚えた。

「ハンマーで叩かれたのかしら？」

まるで挽肉みたいな臭いだと私は訊く。

「ハンマーだけじゃないな」

ミキサーも使っていると飛天は言い返してきた。

「それでよく吐かないわよね？」

「珍しいものだ」

普通なら吐くのに、と飛天は言いながら臭いがする部屋のドアを開けた。

「これは伯爵様・・・・・」

部屋の中には男が４人いた。

１人は椅子に縛り付けられており、残り３人は軍手にハンマーとノコギリに釘を持っている。

「あらあら“挽肉”になってるわね」

私は椅子に縛り付けられた男の足を見ながら独白した。

「はい。ですが、そろそろ“焼こう”と思っています」

「あまり時間を掛けるな」

飛天は男に近付くと頭を掴んで俯いていた顔を自分へ向かせた。

男の顔は水ぶくれみたいにボコボコだった・・・・・・

「俺が誰だか判るか？」

「ふ、ふぉの、ふごいぼれ・・・・・・」

「この老いぼれか・・・言ってくれるな」

飛天は冷笑を浮かべると挽肉と化した足を踏み付けた。

食い物が踏み付けられて弾けるように足もまた弾け飛んで私たちの居る床に飛び散ったが、誰も気にしなかった。

寧ろもっとやっても良いとさえ思っている。

こんな事を考えるから周りからは「イカレテいる」と言われるんだと思うけど、この“腐った園”で果たしてイカレテいない者など居るのか？と逆に問いたくなるわ。

「ッ～～～～～！！」

男が声にならない悲鳴を上げ身を捩るが固定されているから動けない。

「俺が知りたい事を言え。そうすれば楽に死なせてやる。だが、嫌なら苦しみをタップリを与えてから殺してやる」

どちらが良い？

グシャ・・・・

踏み付けていた挽肉を靴底で更に踏みならして飛天は問い掛けた。

またしても男は悲鳴を上げたが、飛天はもう一度きいた。

「どうする。答えろ。餓鬼」

「ふ、ふぉはいますっ・・・・ふぉあます」

「素直で宜しい」

飛天は足を退けて先端に溜まった灰を指で叩き落とした。

「先ず雇っていた会計士は何処へ逃げた。金は？銃は？女は？家は？全て答えろ」

男は声にならない声で喋り出した。

理解できない言葉なのに飛天には理解できたのか頷く。

最後まで聞き終えた飛天は男から離れた。
男はやっと解放されたというように息を吐いたが飛天はそこへ絶望の言葉を投げ付けた。
「こいつを“ミンチ”にしてから“焼け”・・・死体はこいつに相応しい所にでも捨てておけ」
「畏まりました。伯爵様」
メイドマンの一人が顔色一つ変えずに頷いた。
「ふ、ふぉあすが・・・・・・・・」
男はこの言葉に抗議するように飛天へ何か言ったが理解できない。
「約束？約束なんてした覚えは無い」
確かに飛天は約束などしていない。
素直に吐けば楽に死なせる、とは言ったけどね。
「ふがぃますが！！」
「悪魔だと？今頃気付いたのか・・・愚か者が。この悪魔である俺が支配する土地で罪を犯したんだ」
想像を絶する利子を付けるのは当たり前だと飛天は開き直るように言い更に絶望の言葉を投げた。

「せいぜい苦しんで死ね。もっとも・・・地獄では更に厳しく苦しませてやるという事は“約束”してやる」

飛天は背中を向けたまま言うと私の横を遮り部屋を出た。

男は声にならない言葉を飛天に投げるが誰も気にしない。

私は彼の跡を追い掛ける前に男へ餞別の言葉をくれてやった。

「私からも約束して上げるわ・・・・せいぜい神に、天使に祈りなさい」

誰も助けてくれない事を約束してあげる。

そう言って私は飛天を追い掛けた。

第四章：祈りと絶望

路地裏から出た私と飛天は再び車に乗り込んで発進した。

「次は何処？」

「パリの中に隠れ家があるらしい」

そこに金と武器を取りに行き高飛びする気だと飛天は言った。

「急がないといけないわね」

高飛びなんてされたらまた探すのに苦労するわ。

特に顔が世間で知られている以上は整形をする可能性もある。

整形なんてされたら幾ら飛天の力でも探すのに一苦労だからそれは何としても避けなくてはならない。

「だが、ここからそんなに離れていない。それに・・・追い詰められた獲物ほど切羽詰まる」

逃げても痕跡を必ず残すから直ぐに追えると飛天は言ってみせた。

獲物、ね・・・・・

「これじゃ狩りね」

「狩りじゃない。狩りというのは獲物と狩人の決闘だ。これは・・・

遊びだ」

獲物ーーー逃げる下種を追い掛けて弄ぶから遊び。

何時もの飛天ならこんな言葉は吐かないが、事件が事件だけに些か憤りが激しいのかもしれないわね。

でも、これ位で情緒不安定になるような男ならとっくに死んでいる。

それでも死なないし皆から慕われている事を鑑みればまだ問題ないという事。

ただ少しだけ悪魔の本性を露わにしただけの話。

「依頼人も娘の仇を討ってと言ったけど・・・それ以外は何も言ってないから問題ないわね」

依頼人は娘の仇を討ってくれ、とは頼んだけどそこまでの過程は何も言っていない。

だから私たちがどんな手を使おうと・・・あいつ等を弄んだ末に殺そうと依頼人は何も言えないし言わない。

寧ろ娘がされた以上の苦痛を味合わせて死なせるのだから心の何処かではそれを願っているかもしれないわね。

よく推理ドラマとか刑事ドラマだと「こんな事は望んでいない」とか言うけど、それは嘘。

絶対とは言わないけど・・・身内が、しかもまだ２０にも満ちてい

ない子が凄惨な殺され方をすれば誰だってそれ以上の苦痛を味合わせてやりたいと願う。

ただ、それをドラマとかで描くと批判が半端ないし論理的にも不味いから描かないだけ。

まぁ、私達に論理なんて無いわ。

逆らう者は皆殺し。

罰を犯したらそれ以上の罰で応える。

これが私達のルール。

世間一般の論理感や法律なんて糞喰らえだわ。

などと思っている間にパリに到着した。

パリは２０の行政区に別れている。

向かう先は８区ーーー“シャンゼリゼ通り”よ。

パリの凱旋門からテュイルリーまで続く区であるからパリの歴史軸でもあるわ。

こんな所に隠れ家を持つとはどういう思考なのかしら？

こんな観光地では嫌でも他国からの人目がある。

となれば嫌でも自分の姿が目撃されて話題になる筈。

それなのにこんな所を隠れ家に選んだ理由は何？

「どうしてあいつはこんな所を隠れ家にしたのかしら・・・・・・？」

私は彼に訊く訳でも無いのに独白した。

「・・・何かあれば人質を直ぐに取れるから、観光客に紛れられるから、というのが理由かもしれないな」

飛天は私に夜歩くを勧めながら推測を口にした。

「なるほどね。確かにありだわ」

夜歩くを受け取りジッポ・ライターで火を点けながら私は頷いた。

人質なんて誰でも良いという訳ではない。

いや、実際誰でも良いという場合はある。

だけど、大抵の奴等は自分より弱い立場の人間である女・子供を人質に取る。

・・・待って。

もし、これが人質ではない目的があったら？

「もしかして、また殺人を起こす積りでここを選んだとも考えられない？」

「有り得なくは無い。ああいう奴等は矯正できる確率が極めて低い事を知っているだろ」

飛天は火を点けながら私に訊ねてきた。

言葉からはもう確信したと取れる響きがある。

この男が犯した犯罪を改めて思い出してみる。

殺した娘達の人数は3人以上。

共通点は何か？

1．必ず拷問痕がある。

2．麻薬を打っている。

3．強姦している。

4．その動向を録画している。

これらが共通点だ。

攫い方はどうか？

人目が多い所だろうと関係無しに強引な手口で攫う。

殺し方は？

全員バラバラで捨てる場所も違う。

先に上げた共通点はかなり念入りに隠してあったから先ほど判った事。

これらで得られる答えは何？

「・・・あの男は、殺しを楽しんでいる・・・殺すまでの時間を楽しんでいるわね」

この男は“快楽殺人犯”だ。

快楽殺人犯とは読んで字の如く快楽を得る為に殺人を犯す奴等の事。

だけど、殺すだけでは駄目・・・それまでのプロセス―――過程が大事なの。

こいつの場合は相手を強引に攫う所からプロセスは始まる。

そこから拷問し麻薬を打ち強姦する。

そして殺して死体を遺棄する。

恐らくスナッフ・フィルムを売買する仕事に就いていたのもそれを抑える為かもしれない。

私達が追っている事を向こうは気付いている筈。

逃げる事が出来ないと知ったら、どうする？

自暴自棄になって誰振り構わず殺す――無差別殺人犯になる可能性もある。

一先ず警察に捕まえてもらい私達が手を出せないようにするかもしれない。

「・・・少し使うか」

飛天は右目に手を掛けた。

「・・・飛天」

私は彼に声を掛けて止める。

「・・・安心しろ。あいつ等を殺すまでは・・・・壊れない」

そう言って飛天は眼帯を外し赤い眼を露わにした。

「・・・・・・・」

私は煙草を灰皿に捨て何時でも止められるように準備する。

赤い眼は飛天にとっては枷。

その枷を外すと言う事は、彼自身の力を放出する。

だけど、それを行うという事は彼に負担が掛る事を意味しているの。

飛天が壊れないと言ったのはこれが理由。

飛天は左の眼を閉じて赤い眼だけで運転をしているが、魔術で獲物を見付けだしている最中だ。

「・・・見つけた」

そう言って彼はハンドルを切り右側の道路へと強引に入った。

前方から来ていた対向車は思わずブレーキを踏んで事なきを得たが、ドアから降りるなり「馬鹿野郎！！」と怒鳴り声を上げてきた。

しかし、飛天は見向きもしないで車を走らせ続ける。

道路を走り続け飛天は私に銃の用意をしろと命令してきた。

「・・・分かったわ」

私はジャケットに手を突っ込んでコルト・パイソンを取り出した。

道路を真っ直ぐ進んで行くと・・・・・・・・

「見つけたぞ。糞餓鬼」

アクセルを更に踏み付けて飛天は左眼を開けた。

そして右眼を閉じた。

前方には男が玄関から出てこようとしている最中だ。

写真で見た糞野郎。

車で逃げる気？

そうは・・・・・・

「させないわよ」

私は窓を開けてパイソンを持つ右手を出した。

そして車のタイヤに狙いを定めて引き金を引いた。

重い反動が右手全身に襲い掛かるが、大した反動ではない。

タイヤを撃った後は男の間近に狙いを定め撃つ。

男は私と飛天の存在を知るや急いでドアへ隠れて鍵を締める音が聞こえてきた。

「・・・掴まってろ」

グンッと更にスピードが上がる。

もう時速は１００を優に超えているから当たり前だ。

そのまま車は家へと突っ込んだ。

「・・・到着だ」

何事も無かったように飛天はドアを蹴破って外に出た。

私もまたドアを蹴破り外に出る。

そして車の下敷きになった男を見下す。

「て、てめぇ・・・・・・」

「あらあら。足がタイヤで潰されてるわね」

私は冷ややかな眼差しで男の足を見る。

男の片足はタイヤに潰されている。

縦に割れて中身が外に出ていた。

「・・・捕まえたぞ。糞餓鬼」

冷ややかな口調で喋りながら彼は無造作に餓鬼の髪の毛を掴むとそのまま引き摺る形で上に立たせた。

お陰で片足が千切れたけど、構わないという感じだ。

男は悲鳴を上げたが、誰も見向きもしない。

「結界を張ったの？」

結界とは自分を護る物でもあるが、逆に相手に知られないようにする為の物でもある。

つまりこれさえ張ってしまえば誰にも気づかれずに事を運べるという事。

こういう時に私たちの力は便利だと思うが無闇に使う物ではないとも改めて知らされる。

「さぁ、これからタップリとお前を痛めつけてやる」

「お、俺があんたに何をしたんだ?!」

男は我慢汗を流しながら飛天に唾を吐く勢いで詰め寄る。

「俺の領土で罪を犯した。それだけで俺の逆鱗に触れた」

理由はそれだけで十分、と飛天は言う。

「あ、あんたの領土なんて知るかっ。今は21世紀だ。貴族だろうと法には・・・・ぎゃああぁ」

最後まで言う前に飛天は男を後頭部からボンネットへ叩き付けた。

ボンネットが男の後頭部を残し全て上にあがった。

「法を破ったお前が俺に法を説ける身分か?」

俺もお前も法の外に居る身だ、と飛天は言い彼の頭をメキメキと音を立てさせながら握り締めた。

「俺もお前も人殺しだ。糞が溜まった場所へ落ちる身分だ。だが、俺とお前の違う所を教えてやろう」

俺は麻薬と人身売買が大嫌いだ。

そこが違う所。

「さぁ、豚のように悲鳴を上げろ。ひぃひぃ泣いて喚け。命乞いは聞かないがしろ。地べたを這い蹲って泣け。ジワジワと首を絞めて殺してやる」

「それから神と天使に祈りなさい」

私は彼の言葉を遮り言った。

「神も天使も祈った所で助けには来てくれない。でも、祈りなさい・・・・そして絶望しなさい」

誰もこの世には救世主など居ないという事を知って死ね。

私は男の手に煙草の火を押し付けて消すとパイソンの撃鉄を起こした。

さぁ・・・豚のように悲鳴を上げて泣き喚きなさい。

愚かな糞餓鬼。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7789v/

非情な天使（改稿編）

2011年10月25日21時43分発行